

RE 総集編 01



RE01

RE02

RE03

RE04



For Adult Only

RE総集編01



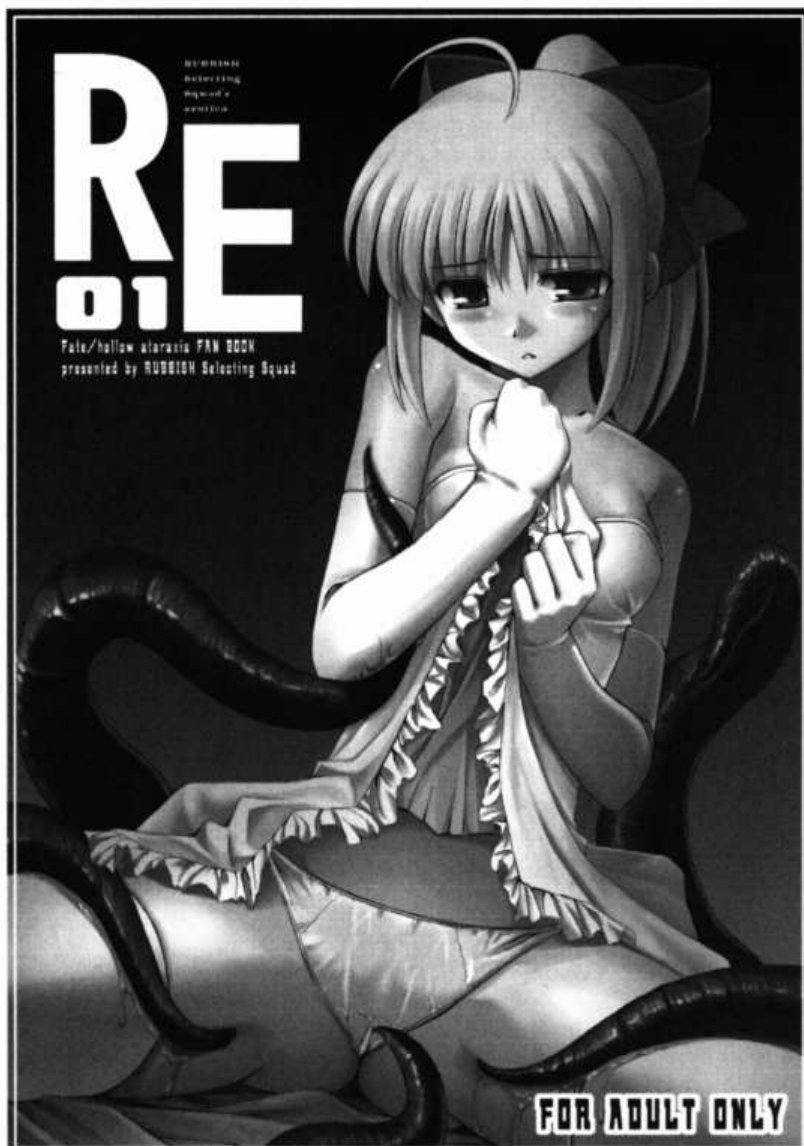
M A E G A K I

お久しぶりです、又ははじめまして。
無望菜志です。

この度総集編を出す事にしてしまいました。
「総集編ですってよ、奥様」
「やーね、無望菜志も随分クソ偉そうになったもんね」
そんな心の井戸端会議に挫けそうにもなりましたが
今回は作業時間が取れそうになかった事もあり
やむを得ずこのような体裁を取らせて頂く事を
心よりお詫びいたします。

詫びも土下座もいらねーから新刊描けと
心暖まるご指摘を頂ければ幸いです
描けて言われたってホント時間無いんで無理ですわ！
ほんと複数連載抱えながらも
ちゃんと同人誌出してる人見かけると
色々信じられませんわ……。

さて、さすがに見返すとなると
覚悟のいる出来な漫画ばかりですが
最後までお付き合い頂けますようお願いいたします。



おのれキャスター
人質などと…

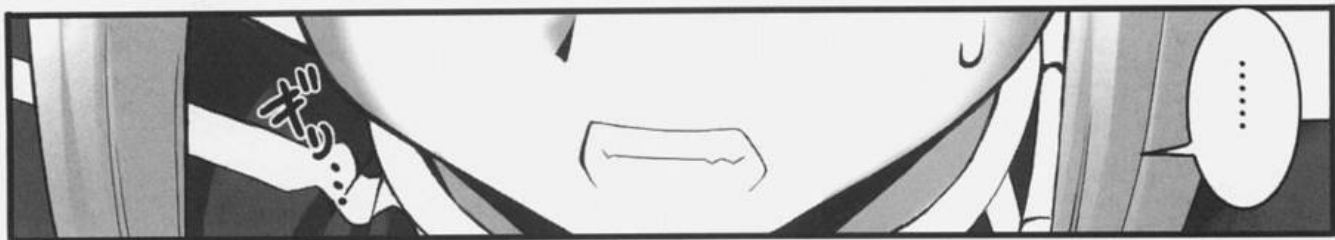
英霊として
恥を知りなさい！

安心なさい

ちよっと
私の言う通りに
してくれれば

坊やに
手は出さないわ

セイバー！
俺の事は良い
逃げる！



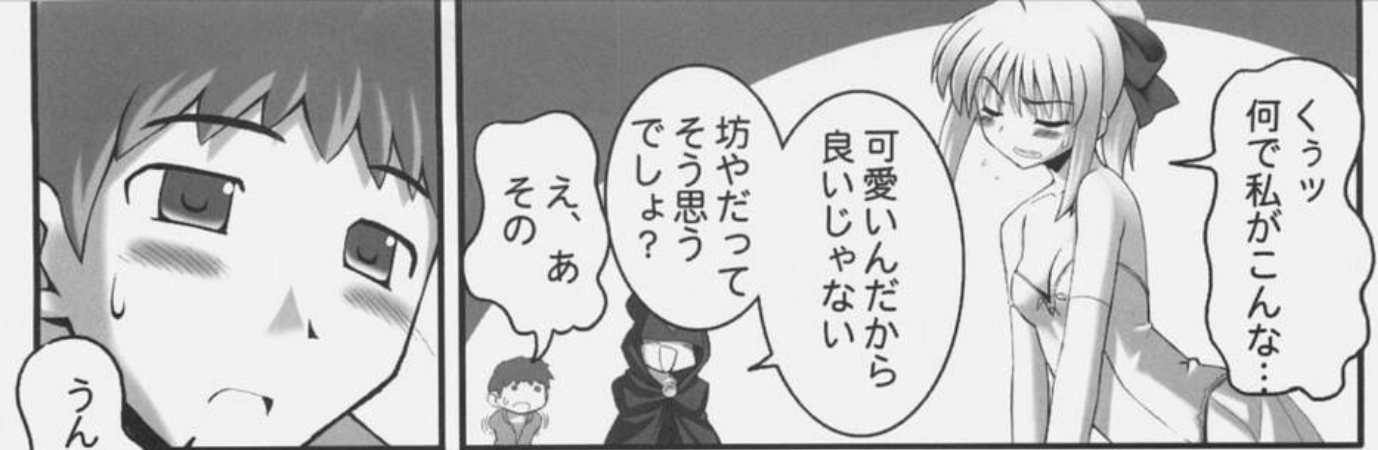


ほわわわわ



あーいいわあ

やっぱり
似合うわあ♪



くうッ
何で私がこんな…

可愛いんだから
良いじゃない

坊やだって
そう思う
でしょ？

え、あ
その

うん…可愛い



あらやだわ

…ッ
キャスト
もういいでしょう
シロウを
開放しなさい！

カー

ミヤ
ミヤ

本番は
これからよ



なッ!?



これは…

くう…



本当に可愛いもの
や綺麗なものって
穢れた時にこそ
一際輝くものよ

キャスターツ
あんた何をツ!



私はそんな彼女を
見てみたい

精と欲に喘ぎ

ちゅる

ブルブル

ちゅる

ブルブル



愛液と恥辱に裝飾
された騎士王…

おっ

おっ

ブル

ブル

ブルブル

ブル



達してしまうほど
美しいと思わない？

趣味悪すぎだぞ
アンタツ!!!

ツツツ…



大丈夫か
……ってブア!



ツ!
セイバー!



ダ、ダメです
シロウ……

見ないで……
下さ……ッ

ひうッ!



ツ
ああ!?



……あ、
……め



ズル……



坊やが見ないとつまらないでしょう?

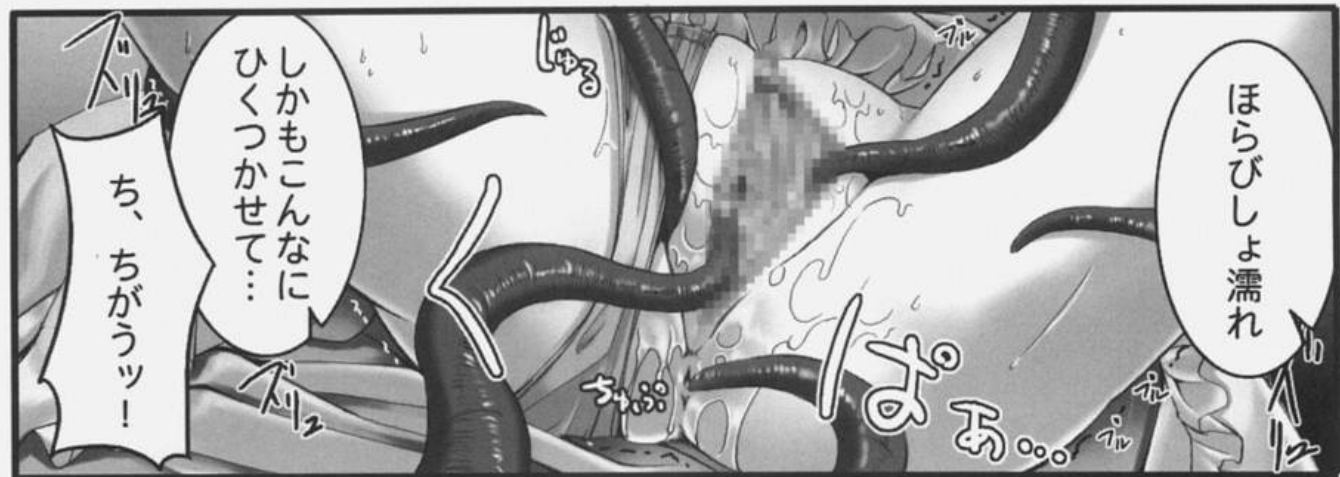
く首がッ!?



セイバーだって...

本当は見てもらいたいものだから

ッ!



ほらびしょ濡れ

しかもこんなにひくつかせて...

ち、ちがうッ!



違う?

ああ見せたいんじゃなくて

入れて欲しいの
かしら？

ツ
!?

そうよねえ
おもらしした
みたい濡れて
るんだもの

辛いわよねえ

ひうッ

や、やめなさッ

ツああ

や、
ああッ！

ズグズグ

びんびん
びんびん
びんびん

ハッ
ハッ
ハッ

ヒッ
ヒッ
ヒッ

ふふふ
辛そうね

なら坊や

くツ……

びり

ハッ

しゅ

しゅ

!?

あなたが
してあげる？

ぬちあ

か

はあ…

くちや…

ぬちあ

この子達に
させるだけだから

出来ないなら
良いわ

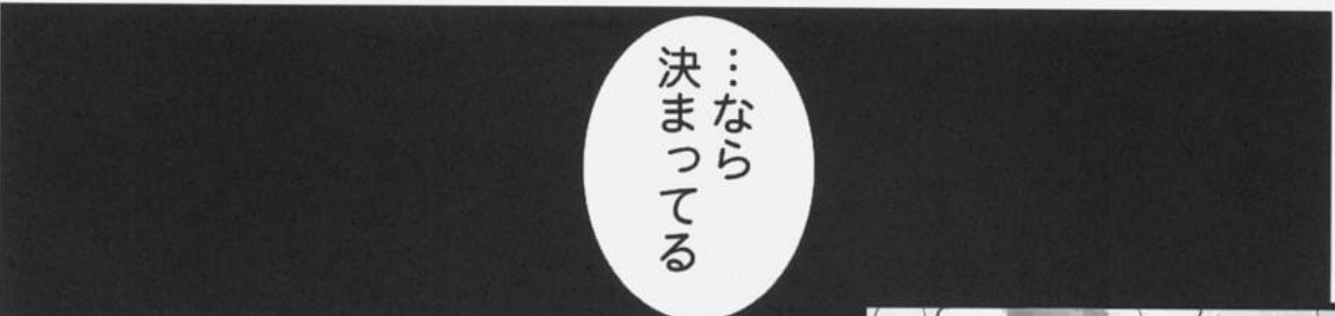
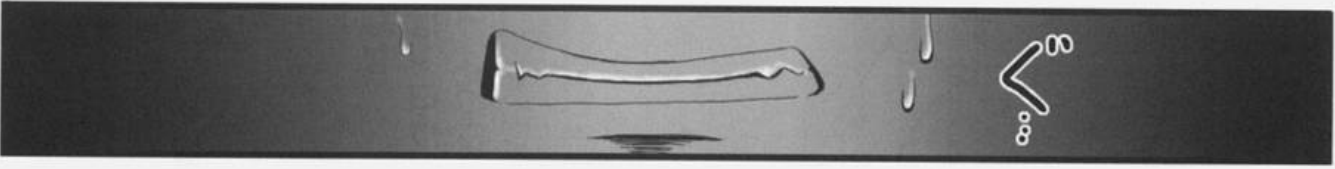
そ、
そんな事…ツ!

ズズズ



どうする？
このまま
汚されるのを
黙って
見ているか

貴方が
自分の手で
汚すか



…なら
決まってる



ダ…メ
…シロウ…

こんな…私…
汚れてるのに…

ずい…

ぐちゃ…



セイバーは
綺麗だよ

いつだって
綺麗だ…

あぁう…
ダ、ダメです
シロ…ツ

そんな、
私はシロウが
思うような…



ふあッ

んダ…
うメ…

ズグ

ズグ

あぁッ

はッ
あぁう

こんな…の
…ツう



そんな
入ってッ!

ひう



キヤスター!?

手伝ってあげてる
んじゃない

坊や
優しいすぎるもの

セイバーだって
これくらいして
もらわないと

満足出来ない
でしょ?

ひ、ひがう…

わらひ…
こんらの
ああうッ!



あらもっと
欲しいの？

欲張りねえ



そ、んな、ああっ
大きくウツ！



裂け、るツ
裂けちゃ…ツ！



ホホホ
大きくなった
でしょ？

あ、あんた
今度は何を…ツ

ちよつと
した呪いよ
二人一緒に
達すれば
解けるわ

まあその前に

セイバーが
壊れなければ
良いけどね

くうッ

ひうッ
シロ…ウが

あああうッ
ふあッ、はあッ！

シロウのがッ
…ああッ！

わ、わらひの…ッ
奥…潰れる…ッ

つ、潰されちゃ…ッ



ッ!
ごめ、セイバー
こんな…ッ

い、いひんで、す
シロツ…ウ

気に
しないでッ

わらひの、ッ
事は…うッ!

あああッ



セイバー…ッ
俺、もうッ

ああッ
シロ…ッ

わら、ひもッ!

もう、
潰れてッ

おかひくッ
あふッ

くああうッ



何が眼福ですか…



ふう眼福眼福

良いもの
見せてもらったわあ



こんな事…

一体何考えて…



はう…

セイバーッ!?

腰から
キてるわねえ

その様子だと…

私以上に
楽しんでもらえた
見たいねえ

なっ!
!?

おほほほほ

満足頂けて
私も嬉しいわあ

ッ!
自分から仕掛けて
おいて何を…ッ!

おほほほ
怖い怖い

さて切り捨てられる
前に魔女は
消えろとするわ

こんなッ

こんな事
私が楽しむわけがッ

ホント
何したかったんだ…

ってセイバー
服…着てくれないか…

~~~~~ッ!  
~~~~~ッ!

■状況謎だらけなセイバーさん。
なんだろ、エロス関係で馬鹿にされて
ならいっちょやったるぜ、と自ら誘う？





□一応経験済みらしいけど
Hは苦手そうなバゼットさん。
触手なんかにはやられた目にはもう
ハイライトだって消えかかる。
なんて酷い妄想してました... (汗)

■カレンさんはエロい娘です。
なんかもう複数プレイだろうが
触手だろうがなんだかんだ言おうと
すんなり受け入れそうな気配。
その割にS気質だし。
エロい。



NAKAGAKI_01


以上RE01でした。
記念すべきREシリーズの一作目ですが
単に毎回タイトル考えるのが面倒になっただけの話です…。
Fateのエロはこれ以前にも描いていますが
さすがに誰が得するのかわからないような出来だったので
掲載は見送りました。
このRE01も充分ヤバイ出来でしたけどね…

まあ4年も前の本なんで勘弁してください(汗
今見返してみると、この本が純愛触手のルーツ。
なんでこんな内容にしようと思ったかは
さっぱりですけど…。

続きましてRE03をどうぞ




RE03 2006年08月13日 C70初出




私は口にしていた
というのか……!!


……なんと言うことだ。
あの斬っても斬っても
果てなかった異界の邪神を



久しぶりに
夢を見た……




と、セイバーが
タコ嫌いを
語った夜の事



……異界の
生物一匹に

兵は全滅……



騎士王と
呼ばれた私まで

この有様とは……

愚か者のう

星霜の果てに
住まいし異貌の神を
祖とする余に……

猿のvari種に
過ぎぬ人間が
適うと思うたか

な、神だと…ッ

ふんッ
余を討とうなぞ
無知が過ぎるが

ズルズル

余興としては
楽しめた

だが
足りぬッ

何ッ!?

もう一時、
余を楽しませよ

んあ

ギッ

ずいゆん

汝の身を
もつてな…

!?



んうッ!?



その身に澱みし
穢れを払うが良い



我が神酒にて

まずは清め

んうッ!?



何だ…コレは…
酒…？

だが今まで
口にした如何なる
ものとも違う

甘く…薫り高い…

信じられん



なんたる…

美味であろう？

ツあ！？



びゅるる



バカを言う！
さあ殺せ！
食らうが良いッ！

だが覚悟せよッ！

ハッ
ハッ
ハッ



がッ、あがッ

かはッ

ドロッ

げほッ

こほッ



王の意地にかけて
貴様の臍腑を
食い千切り

地獄の苦しみを
与えてくれるッ！

勘違いするな
人の王よ

言ったはずだ

ズル
ズル
ズル
ズル



楽しませよと

!?



な、なにを
する!

美しい肢体を
持ちながら...

生まれを偽り
騎士王として
君臨する女...

くくくく
楽しみよう

ずる
ずる

汝の蜜壺は
如何な
味わいか

……
これまでか……

だが恥辱に
塗れる
くらいなら

せめて
騎士として……

ッ
ああああ!!?

ズ
……
#

キ



くはははははッ
無駄よ無駄あ

ッああああ!?

あ、あああ
あああッ!!!

我が洗礼を
浴びたとあつては

おのが命とて
自由に出来る
と思ふな

あ、がッ!?



だが先ほど
意地があると
申したな

よかろう
その意地とやらに免じ
自害を許そうでは
ないか



だがそのように
声をあげ

はしたなく涙を
垂らし呆けた口を
閉じねば

いつまで
経とうと



舌なぞ噛み
切れぬぞ
騎士王よ？

許せない……

敗北と屈辱を
受け入れている
非力な自分が

ズ
ッ
ッ

ズ
ッ
ッ
ズ
ッ
ッ

あ
あ
あ
ん
あ

泣いてばかりでは
わからぬぞ
騎士王よ？

ゴ
ポ
は

ひと突きごと
身体がたかぶって
いく自分が

あ
ゴ
ポ
ゴ

答えられぬのか
騎士王よ？

なにより…

あ

あ

ああ、
それとも
既に…

とうに捨てた
はずなのに…

あ
あ
あ

あ
あ
あ

メスとしての喜びに
意地も誇りも
消えてしまうたか？

ッ
ああああ!!?

少女のような
泣き声を上げて
しまう自分が

許せない……ッ!

さすがという
べきよの、騎士王よ

ほう？
この期に及んで
まだ目が曇らぬとは

そして共に闘う兵も
守るべき民も
ここにはおらぬ

やめ…ッ!
触る…なあッああッ!

裏からッ
かき、まわされ
…てッ!?

そう、誰に
はばかる事なく

だ…めッ!

心行くまで

おねが…っ
やめて…ッ!

あッ!
んああああはあッ!!

ひり出すが良い

やッ!

ぷちゅ

ぐんぐん
ちゅ
おんおん



また...入ってくる
...ううッ!

また出ちゃう
あああ!

びちゃびちゃ



あああッ
めくれ...ッ

めくれ...るう
あッ!

ブポ...



で、出ひゃ
出て、る、ッ!

出てるのに!
掻き...回されて!

びちゃ

びちゃ



何れでもなからう
そう、今汝の心を
占めておるのは

びちゃ

びちゃ

びちゃ

びちゃ

びちゃ



悔しいか?
悲しいか?

ふふふ
女陰を掻き抉られ
ながらの排泄、
如何かな?

びちゃ

びちゃ

ただただ快楽への
欲求のみであろう？

ツんああああ!?

ズンンン!

ふふふ、
コシだけ啜え込んで
なお締まりが増す

よほど色に
飢えておったか
騎士王？

ひが、ひが、う…
んつぶうう!?

くくく
違うだと？



あぁ!!

ぐんぐん!!

や、やあッ

ひあッ
ああッ!

ぐんぐん
ああ

あ

ひあ

ひあ

びしょびしょ

ひあ

後に王を救うべく
国からやってきた
騎士達が見たのは

王の変わり果てた
姿だった

ただ
無数に小さな魔物が
絡み付いてはいたが

不思議な事に
王の軍勢を
壊滅させたという
魔物の姿は無く

無事王を
連れ帰る事が
出来た

だが民と騎士達の
混乱を恐れた
魔術師が関係者の
記憶を奪い、
一切の記録を抹消

現在彼の王に
関わる文献に
それらの痕跡が
見つかる事は無い

次の日

セイバーって…
タコのお母さん？

は？

夢才子

RE総集編01

琴月 一純

「セイバー、提案なんだが」

そろそろ皆自室に引き上げていてもおかしくないそんな時間。部屋に入ってきたセイバーを見るなりそう切り出した。

風呂上りなんだろうね。セイバーはまだ髪を結っていないかった。髪を下ろしたセイバーはとても可愛い。このセイバーを見て男だなんて思う奴居るのか？ ってくらい。

王様時代にも髪を下ろす事があつたとしたら、そこで絶対臣下の人たちにもバレてると思う。

「……………提案ですか？」

なんでか、返事が来るまでに少し間があつた。顔もどこか赤い……………突然「提案がある」とか言われれば訝しがつてもおかしくないか。

だが、戸惑いつつ小首を傾げるセイバーは反動的に愛らしかった。そんなセイバーを見られただけで今の提案には価値があつたと確信する。

というかですね、もう我慢できないですよ？ ぶっちゃけた話こんな時間にセイバーが俺の部屋に来るって事は要するにセー

「シ、シロウっ！ いきなり何を言うつもりですかっ！」

怒られた。

…あれ、なんで俺の考えてた事が解つたんだろ。直感って奴？ 「……………違います。さっきから口に出ているだけです」

「おう…」

なんてこつた。そんなベタな事をしていたとはね。気をつけようぜ？

「…あの、シロウ？」

「んゝなに？」

「もしかして酔っていますか？」

「いや、全然」

確かに酒は飲んだけどね。たまたま気が向いてセイバーが風呂に行つてる間にちよつとだけ飲んだ。お猪口で舐めるくらい飲んだだけじゃ流石に酔っ払つたりはしない。

けどセイバーは疑わしそうに見つめていた。

「…………」

思わず見つめ返す。

照れた。

「ほっ」

「…はあ……………完全に酔っていますね」

溜め息を付いてセイバーは踵を返した。

「今日のところは大人しく寝てください。私ももう寝ます」

そう言つてセイバーは部屋を出て行くとする。

「ちよつと待て」

がっしとセイバーの肩を掴んで止める。

「は、はい？」

「提案があるって言つたろう？」

「はあ、確かにそう言われましたが……………今日はもう寝た方が良

いのでは？ 何かあるなら明日にでも」

「今じゃなきや嫌だ。聞いてくれるまで離さないぞ」

そう言つてじつとセイバーを見つめる。今度はさつきと違つて

真剣に。

「…子供ですか」

はあ、と溜め息をついてセイバーは俺に向き直つた

「解りました。言つてみてください。私にできる事なら何でも

「しましょう」

「ほんとに？」

「本当です。それとも私が約束を破るとでも思いますか？」

「いや全然」

満面の笑みを浮かべて答える。なんだか楽しい展開になつて来た。

「それじゃあ、コレを着てくれ」

そういつて、おもむろに取り出したのは徳群原の制服。

ただし、女子用。

「……………は？」

目を丸くして驚くセイバー。

「ななな、なんですかコレは」

「制服」

「それは見れば解ります！ 私が聞いているのは何故シロウが女生徒の制服を持っているのかという事です！」

「安心してくれセイバー。俺にこういう物を買つて喜ぶ趣味がある訳じゃないぞ？ ちよつと、遠坂の部屋から予備を拝借した

「ただ、遠坂寝てたしね」

「我ながら中々のスネークつぶりだったと自負できよう。でかい口ポっぼいのをRPGで破壊するくらいスネーク。」

「忍び込むのになんか関係あるのか？」

「よく涼に気付かれずに……いい、いえそうではなくて！」

「盗みの方が余計性質が悪いっ！」

「失礼な。ちょっと借りただけだよ？ ……まあ、遺憾ながらそこ」

「ここに本人の意思が介在してない事は認めるに各かではないけど」

「とにかく、これは私が没収します。私から涼に返しておきま」

「すから、もうシロウは大人しく寝てください!!」

「そう言っつて、俺の手から遠坂の制服を奪い取ると、セイバーは」

「再び踵を返した。」

「ちよつと待て」

「俺も再びセイバーの肩を掴んで止める。」

「……なんででしょうか？」

「さつきとは違っつて、つーんとした表情で俺を見ている。」

「いや、さつきセイバーはこう言っつたよね『何でもしましょう』」

「っつて」

「……ええ」

「「こうも言っつたよね『私が約束を破るとでも思いますか?』」」

「て」

「それは……確かに言いましたが……」

「そう言っつてセイバーは俯き俺から目を逸らした。」

「あ、なんだろコレ。なんかイケナイ快感に目覚めそうな予感。」

「今なら放課後の教室で、」

「『今センセイの事えっちな目で見ていたでしよう?』」

「『み、見てません!』」

「『う・そ。こんなにココを硬くしているじゃない』」

「『それは……』」

「『ふふ……可愛いのね。そんなに見たいのならお願いしてごらん』」

「『え?』」

「『お願い。上手く出来たら見せて上げるわよ?』」

「『お願ひ。上手く出来たら見せて上げるわよ?』」

「『とかなんとか言っつて、シヨタツ子をいぢめる』」

「『女教師 枝里子? 3歳 秘密の放課後』』」

「『AV』」

「の気持ちかわかる気がするっ」

「抵抗できないだろうという立場をよく理解した上で迫り詰める」

「快感?」

「『ほ、ほ、ほら、そんな誤だからセイバー』」

「妄想でちよつぱり興奮しながらセイバーに詰め寄る。」

「『は……』」

「『は?』」

「『馬鹿者ですか……!』」

「怒られた。」

「『何が女教師ですか! 不埒な事を言っつてると怒りますよ!』」

「また考へていた事を口に出していらしい。」

「『いや、もう怒っつてるじゃないか。すっく』」

「『つべこべ言わない! どうしたというのですか?! いくら酒に酔っつているとはいえ、約束を盾にして無理に要求を通そうとするなんて貴方らしくない!』」

「『ん……』」

「『そう言われれば確かにちよつと調子に乗りすぎたかも知れない』」

「が……」

「『だけどさ、セイバー』」

「『なんですか? まだ制服を着ると言うのなら、合呪を頂くこ』」

「『とになりますよ』」

「『うっわ。なんだか、セイバーの俺に向ける視線がかつて無いほどに冷たい。』」

「『今までこんな目をしたセイバーを見たことは無——ああ、ギル』」

「『ガメツシュを相手にしてる時はもつと酷かつたな。』」

「『そう考へると凄いなアイツ。そんな扱ひされてるのに臆面も無』」

「『く求婚なんてできる神経だけは尊敬できる面もあるかもしれない。』」

「『もしかしたら単に見下されて喜ぶ困った性癖があるだけかもしれないけど。』」

「『突然黙り込んでどうしました? 用が無いのなら今度こそ私』」

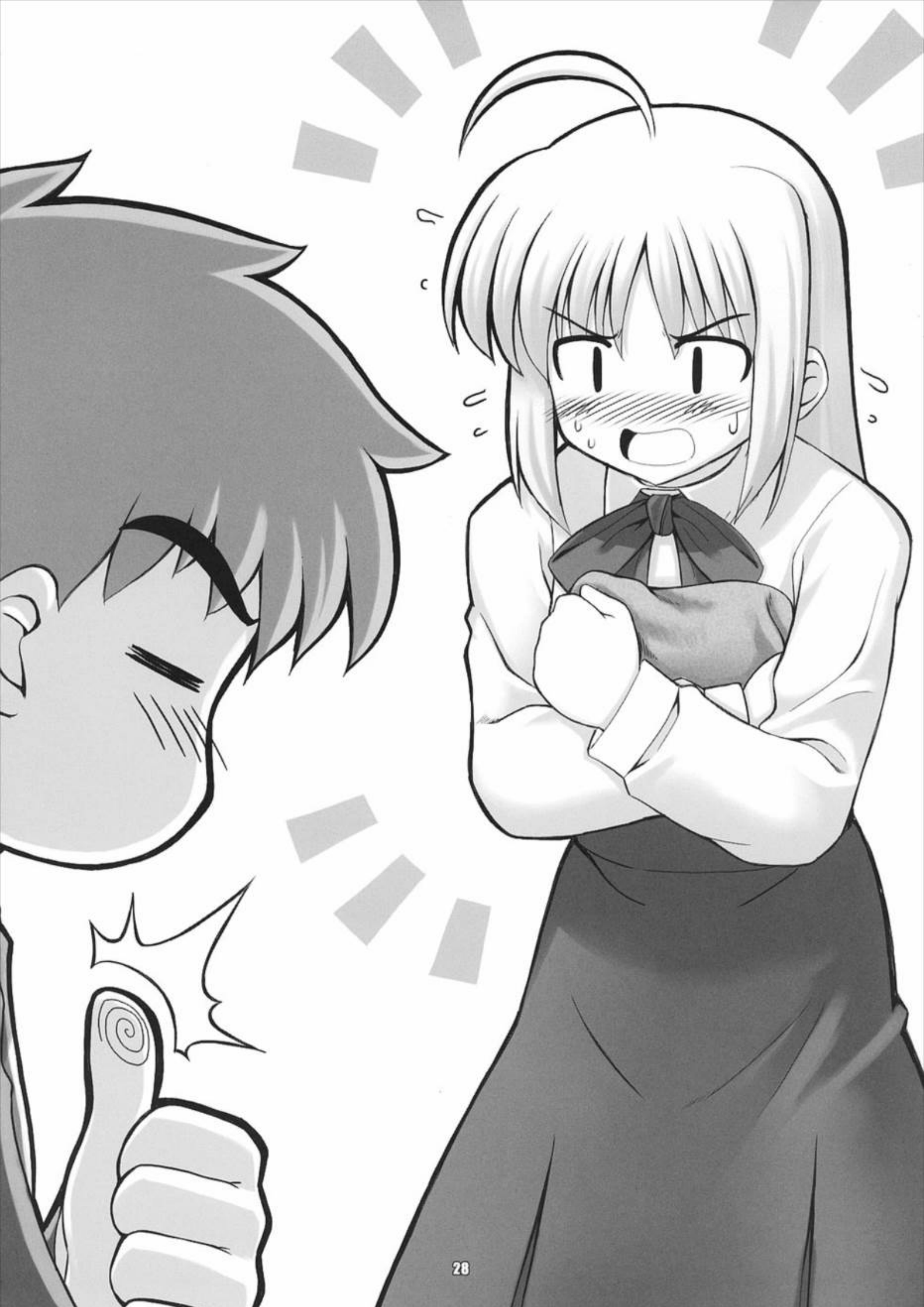
「『は行きますが』」

「『三度部屋を出ようとするセイバーを呼び止めた。』」

「『ごめん。どうしても見たかつたんだよセイバーの制服姿が』」

「『……先ほどの妄想の下りも問題なのですが』」

「『可愛かつたから』」



「はい？」

「セイバーの困った顔が可愛かったからちよつと調子に乗った。すまない」

正直に言つて大人しく頭を下げた。

酒にやられた(らしい)頭でも流石にここは真面目に謝らなきやダメな場面だつて事くらい解る。

「……………はあ……………まあ、良いでしょう。何を飲んだのかは知りませんが、変な酔い方をしているようですし……」

「えーつと……………ああ、そうだイリヤと遠坂が『お土産』とか言つて置いていった奴。あの二人で一体どこに行つたのかは知らないけどさ、土産だつたら飲まなきや失礼だろ？」

「それですね。まつたくあの二人は……………」

え、なに？ もしかして一服盛られたとかそーいう話？

……………思い返してみれば、二人ともどことなく楽しそうではあつたなあ。二人で出かけた先が楽しかつたのかなーなんて思つていたが。

「まあ、でも酔つてないし。別に何も変な事はなつてないし。

良いんじゃないのか？」

「今の自分の状態をおかしいと思わないのが充分おかしいのですか……」

呆れた様子で溜め息をつく。

ふと、思い出したように聞いてきた。

「———そういえば、どうして私に制服を着せようなんて思つたのですか？」

「それは……」

前に学校見学に行つた時にそんな話が出て以来、ふとした拍子に想像していた。

「……………もしもな、セイバーと一緒に学校行けたらなんて考えるだけで楽しいんだ。もし一緒にクラスのなれたらとか考えると嬉し過ぎる」

「……………」

「それに、セイバーが学生になったら……………なることができたらしさ、もう本当に聖杯戦争も何も無い。完全無欠に平和そのものじゃないか」

そもそも、何かの偽装とかでもなく、本気でサーヴァントに制服を着せて“学生”にしようなんて馬鹿な考えなんだろうとは思ふ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

数分後。

コンコンと、ノックする音が聞こえた。

「どーぞ」

返事をする、入り口に少しだけ隙間ができた。そこからセイバーの顔が覗いている。

不審だった。

「……なにしてんの？」

「あの、こういう服を着るのは初めてなので……」

「なので？」

「先程シロウは似合うような事を言っていました、やはりこういった装束は普段から着ている者が着ないと似合わないのではないのでしょうか？」

「なんだか余計な心配をしているようだった。」

「顔だけ出してちらちらと他の様子を窺っている。」

「いつかこんな事言った事あったよね」

「なんででしょう？」

「……是が非でもシロウには見立てていただきます」

「え？」

「あと、『金輪際、シロウの見立てた下着以外は身につけさせん!!』とも言ったね確か」

「あ、あれは……その、勢いといいますか……それに、下着と服では事情がちがいます……」

「いやいや。そうまで言ってくれたなら、大丈夫じゃないか。俺が似合うと思うんだからさ」

大体、『下着を見立てろ』って言う方が難易度高いのに。

「……わかりました……もしも似合ってなくても馬鹿にしたり、笑ったりしないで欲しい」

覚悟を決めるとセイバーは速かった。

返事をするよりも早くタンツと、軽やかな音を立てて引き戸が開かれる。

そこに、制服姿のセイバーが居た。

「——」

言葉が失う。

開け放った戸から吹き込んだ風を孕んで、スカートが翻った。

遠坂の制服はセイバーには少し袖が長かったらしい。ちよこんと愛らしく出した両手でスカートを押さえていた

胸元の赤いリボンがセイバーの可憐さを際立たせている。

見慣れた制服なのに、どうしてこんなにも新鮮に見えるのか。

セイバーが着ているからと言われればそれまでなんだが、そのセイバーも普段とは違っている。

どういう心境からなのかは知らないが、セイバーは風呂に入るときに下ろした髪をまだ結っていないかった。

「——シロウ、聞いていますか？」

「——っ」

呼ばれて我に返る。

いつの間にか風は止んでいた。はらはらと翻っていた髪もスカ

ートも元に戻っている。

「シロウ。そんなに見つめられると恥ずかしい……」

セイバーは頬を赤く染めて視線を逸らした。

言われてはじめて、ずっとセイバーに見惚れていた事を自覚する。

「……俺もなんだか、恥ずかしい」

「し、シロウが？」

「うんだって、俺の想像は全然適わなかったから。完敗」

俺がそう言うと、

「ということは、やはり似合っていないと？故に似合うと思っ

た自分が恥ずかしいという事ですか……」

と、有り得ない事を言っただけだ。

どーしてこういう時だけ巡りが悪いのかね。はつきり言わなきゃ伝わらないか？

自分の反則さにあまりにも無自覚なセイバーにちよつと腹が立つた。

「馬鹿」

「ば、馬鹿とはなんですか！」

「じゃあ、ばーか」

「言い方を変えただけではいいですか!! 馬鹿にしたり、笑ったりしないで欲しいと言ったのに……」

「馬鹿にしてるのはそっちの方だ。セイバーが俺との約束を破

つたりしないように、俺がセイバーとの約束を破ったりする訳な

んか無いだろ」

「そ、それはそうですが……ですが今はつきりと馬鹿と！」
馬鹿にするってのは、相手に直接馬鹿って言うことじゃないと
思うんだがな。

「ふん……」

しかし、何で気付かないかね。俺の視線を受けてりや見惚れて
いた事位普通気付くだろうに。

セイバーはまだ何か言っている。

いい加減うるさい。うるさいから黙らせる。

「聞いていますかシロ—— んうっ……」

何も言えないように、唇を塞いだ。

胸を押されるが、力は弱い。

だから構わずにキスを続けた。

「んっ……あ……んう……」

「……んむ……ん……」

小さいセイバーの唇は驚くほど柔らかい。何度唇を交わしても
この感触に慣れる事は無いような気がする。

「あ……っ……だ、めです……シロウ、だめ……」

弱々しくも拒むセイバー。

だが、聞く耳は持たない。

驚いて口を閉じられたりしないように、少し強く頸を押さえる。

呼吸のために開いた唇から舌を入れた。

「んっ!! ……し、シロウ……んっ!!」

少し、抵抗が強くなった。

無視して掴んだ頸を上向かせると、セイバーの口内に差し込ん

だ舌を躍らせる。

「んうっ!! ……ん、ふっ……んっ……」

舌先がセイバーの舌に触れる。と、セイバーの舌は奥に逃げよ
うとした。

「……セイバー……」

名を呼んだ瞬間、ビクツと肩が奮えたかと思うと、口内の熱が
増した。

「セイバーも、舌を出して」

返事は無い。だが、セイバーの舌は逃げるのを止めた。

それだけで充分だ。セイバーの小さな舌を逃がさないように俺
の舌を絡ませる。

「……ちゆう……ちゆる……ちゆうっ……」

「んんう……んうっ……はあ、はっ……ちゆうっ……」

俺が頸を押さえているせいでセイバーの口は開いたままになっ
ている。

唇の端から唾液が垂れた。

セイバーはいよいよやをするように首を振るが、俺は許さない。

一層口内への愛撫を強くする。執拗に舌をしゃぶり、すすり上げ
る。

やがて、おずおずとセイバーから舌を突き出してきた。

「ん……ちゆう……ちゆう……はあ……」

「あう……んっ……んあ……ちゆるっ……」

お互い、舌を絡ませ合い刺激を与え合う。水っぽい音が部屋に
響く。

溜まった唾液をセイバーに送り込んだ。

「……んん？ ……ん、んう……」

少し驚いた表情を浮かべたが、咽喉を震わせ素直に嚥下してい
く。

絡めた舌を解き、口蓋に舌を這わす。

ちろちろと舐めると、セイバーの舌が俺の舌を追いかけてきた。
逃げるように、唇と歯の間に舌を入れる。

綺麗なセイバーの前歯をなぞっていく。

またセイバーの舌が追ってくるが、俺は舌を引っ込め頸を掴ん
でいた手を離すと、触れるだけのキスに戻した。

「……ん……ちゆう……」

柔くセイバーの唇を食んでから、顔を離した。

「……シロウ」

俺を呼ぶセイバーの声はどこか拗ねるような響きがあった。
呼んだセイバー自身も気付いたんだろう。

「ち、違いますシロウ！これは……」

突然火がついたように真っ赤な顔になって慌て出した。

「そもそも！ な、何故いきなりこのような行為に」
がーっと赤い顔で捲くし立てるセイバーの手を取って俺の胸に
当ててる。

「し、シロウ？ 一体何を？」

「可愛い」

「え？」

「制服姿のセイバーも凄く可愛い。だから、見惚れてた」



「う、嘘です。先ほど似合っていないと——」

「言っていない。というか、似合っていないんだっただらこんなドキドキしたりしない。伝わってるだろ？」

胸に当たったセイバーの手に力がこもる。

「……ええ、まるで早鐘のようです」

「俺がこんなにもドキドキしてるのに、『馬鹿にした』なんてそれこそ馬鹿な事を言うセイバーに腹が立ったからキスした……」

謝らないから俺は

口に出して、今更猛烈に恥ずかしくなってきた。

赤い顔でセイバーから視線を逸らす。

「……すいませんシロウ。謝るのは私の方だ」

視線を戻すと、セイバーのまっすぐな視線に射止められた。

いつもこの視線に捕らえられると目を逸らせなくなる。

「先程、シロウが私に制服を着て欲しいと言った理由を聞いた

時思ったのです。シロウは私をただの『女の子』として扱ってくれているんだと

「……」

「私はサーヴァントです。例え今平和であっても戦いを捨て

事など出来ない。だが、平和な今であれば……一時の夢であれば

一人の『女の子』として今この時だけ振舞う事を許して欲しいと

……そう思いました

だから、制服を着てくれる気になったんだ……

髪を結わなかったのもきつと同じ理由だ。

「それなのに、いざ制服を着てシロウの目の前に出たらシロウ

を疑ってしまった。こんならしくない格好をしている私を馬鹿に

しているのではないかと。——思えばシロウは始めから私を

『女の子』として扱ってくれていたのに——許して欲しい」

「ほか。許すも許さないもあるか」

手を伸ばし、セイバーの顔に触れる。耳に掛かった髪をそつと

払う。

「……ん」

どちらからともなく、顔を寄せて再び唇を重ねた。

唇を割って舌を入れる。

今度はお互い求め合うように絡ませた。

唇を寄せ、より深く。

「ん……ちゅ……ちゅっ……えろ……ん、ふう……」

「んうう……ちゅう……はっ……んく……ん、んっ……ちゅっ……」

絡み合った唾液を分け合って飲み込んでいく。

吐き出される吐息は熱い。

もつとセイバーに触れたい。

そう思った瞬間、唇を合わせたまま布団の上に押し倒していた。

「……あ」

俺の下に組み敷かれながら、向けてくる視線に拒む色は無い。

「セイバー」

名を呼ぶ。

それだけで気持ちは伝わった。

「……制服、汚れてしまいますよ」

「大丈夫。またこっそり返しとくさ」

冗談めかして言うと、セイバーは笑った。

「……なんだ。ちよつと安心した」

「？」

ショーツを脱がすと、セイバーの秘所は蜜を溢れさせていた。

「いや、なんだかんだ言っちゃんとキスで感じてくれてたんだなって」

「あ、あまり見ないで欲しいのですが」

「それは無理。こんなに綺麗なものに見るなって言われても」

そう言つて、セイバーの股間に手を這わせた。

指先で秘唇を割る。

「ん。やっぱり綺麗だ」

「……そこを……あつ……爽められても、あまり嬉しくないのですが

……」

「それはそうかもしれないけど……」

そう言われても綺麗なもの綺麗だ。

聞いたせいでこぼれた蜜が俺の指を濡らした。

顔を寄せる。

ゆつくりと割れ目に舌を押し当て

「——シロウ、なにを」

ようとした所で、気付いたセイバーが慌てて声を上げる。

「何って、セイバーのを舐めてあげようかなって」

「そ、そんな事なくても良いです！」

閉じようとした太ももを押さえる。

「嫌だ。前にセイバーは俺のを舐めてくれただろ？ お返し」

何か言われる前にぐつと足を開かせると、今度こそセイバーの割れ目に舌を伸ばした。

「…あつ……ひやつ……んろううっ……」

甘酸っぱい匂いを吸い込みながら、セイバーの入り口の周りを舐めた。

まだ直接割れ目の中を刺激した訳でもないのに感じてしまうらしい。

その反応に気を良くして、入り口の周りを執拗に舐める。

「…んろうっ……んく……ふう……」

直接感じる部分ではない場所を攻められているせいだろう。

時折もどかしげに腰が動く。

このまま焦らし続けてみたい気もしたが、もう俺が我慢できなかつた。

「んー……えろ……ちゅっ……」

指先でいつそう広く割り開きつつ、舌先を入れる。

剥き出しになった膣壁に舌を這わせながら、指先でクリトリスを探った。

「ちゅっ……ちゅる……じゅ、ずじゅ……」

音を立てて舐めしやぶる。

指先がツンと突る蜜を探り当てた。

びんつと軽く指先で弾く。

「あああつ……し、シロウ……ひやう……んろううっ！」

声のトーンが上がった。

反射的に足が閉じようとする。

「……セイバー足開いて」

「で、ですが、シロウ……んっ!! ……ひゃんっ」

クリトリスの皮を剥いて引つ掻くように弄っていく。

口内に入る量が増した蜜を時折嚙下しながら、舌での愛撫も続ける。

「ん……くちゅっ……れりゅ……」

「あ、あつ……んろう……い、いい……!!」

閉じかけていた足からゆっくりと力が抜けていく。俺の舌と指で与えられる快感に時折腰を浮かせるようになっていた。

「はっ……んん！ ……そんな、両方っ……だ……めですっ！ もつとゆっくりッ……んろうっ！」

「嫌だ。もつとする」

「……ああつ……ど……して……意地悪」

もつとセイバーを鳴かせてみたい。

トロトロと蜜を流す膣口に舌を這わせる。舌でセイバーの膣口に刺激を与えながら、指でクリトリスを弄るのも忘れない。いつ

そう激しくセイバーの陰核を引っ掻いてやる。

「ふあ、あああ！ ……んろううっ!!」

「ンク、んっ……コク、コク……」

膣口に差し込んだ舌から伝ってくる蜜を飲む。

咽喉を鳴らして飲める程、今やセイバーの愛液は溢れていた。

「あ、いやっ！ ……舌……舌が、私の……ひゃんっ……な、中

に入って……だめっ！」

駄目と言いながらも、セイバーの膣は僅かに入った俺の舌を締めつけようとしてくる。

「ん。セイバー……おいしい……」

「もつと味わいたい。」

そう思い、さんざん弄り回したせいでコリコリにしこり赤くな

ったクリトリスを強く押しつぶした。

「ひああつ！ あ、あああつ……!!」

「層声が跳ね上がった。」

それと同時に、とぶりと溢れ出したセイバーの蜜を飲み干していく。

「だめ、だめですシロウ！ ……あう……っ！ ……そ、んなにし

たらもう……」

「イツちゃう？」

俺がそう聞くと、真っ赤になった顔でコクコクと頷いた。

「じゃあ、イツちゃって良いよ」

折角だから、このままイクところを見せて欲しい。

指を膣内に侵入させると、すつかりとろけていたセイバーの内

部は俺の指をあつさり迎え入れた。熱い肉壁に締め付けられながら、セイバーの膣内を掻き回す。

「そ、んなっ！ ……んろううっ！ ……い、や……」

さっきまでのクンニでもうセイバーには何の余裕も無い。一気にイカせてやろうとクリトリスを刺激する。

「……い、やつ……いやですっ……いやっ」

だが、セイバーは頑なにイク事を拒否する。

「……実は気持ち良くないとか？」

これだけ感じていてそんな事は無いだろうが、俺にはそれくらいしか思いつかない。

「ちが……ちがいますっ……」

「じゃあ、どうして？」

「だって……んうっ……一緒にい……一緒に良いですっ……」

「な——」

そんな可愛い事を言っただけの理性を完璧に破壊してくれた。

「あ、いや……だっけどお前、自分は……」

言いかけて止めた。

きつと「殿方は良いのです」とか言うだけだろうし。

「——解った」

弄っていた指を離す。膝内に差し込んでいた指を引き抜くと、

ちゅぽつと粘着質な音がした。

セイバーに触れている間に、俺の股間も痛いほど膨れ上がっている。

股間の前を開け完全にいきり立った肉棒を取り出す。

「セイバー」

さっきまでの愛撫で大量の愛液を流すセイバーの割れ目に、自分のモノを押し当てる。

俺自身、さっきのセイバーの言葉を聞いてから、俺ももうセイバーと繋がる事しか考えられなかった。

「……あ、服を」

「行くぞ、セイバー」

何か吠いたが、聞こえない。

大きくセイバーの両足を開く。

そのまま腰を前進させ、ゆつくりと俺のモノをセイバーのなかに埋めていく。相変わらず狭いセイバーの中はきつく俺のモノを締め付けてくる。だが、トロトロに濡れたセイバーの中は普段よりも簡単に俺のものを受け入れた。

「あ……んんっ……」

セイバーの中はひどく熱かった。その熱でお互い溶け合っただけになつたかのような錯覚。

「くっ……」

あまりの快感に声が漏れた。セイバーの膝内は肉棒の存在を確かめるかのようにギュッと締め付けてくる。

まだ入れたばかりなのに、このままじつとしているだけですぐに射精してしまえそうだ。

「セイバー」

名を呼びながら口を寄せる。

「あ……んん……」

二、三度唇を交わすと、俺はいきなり大きく腰を振り出した。

「ああっ……!! んうう!! ……くああ……ひゃん……!!」

突如与えられた強烈な快感にセイバーは首を反らせて嘔ぐ。

腰を突き入れる度にセイバーは嬌声を上げながら、きゅっきゅつと俺のものを締め付けてくる。

「あうっ……ひゃん……あ、しろっ……シロウ、シロウっ……!!」

結っていない髪を振り乱しながら、セイバーは何度も俺の名前を呼んだ。

それが嬉しくて、夢中で腰を振る。

「ひゃっ、シロウ……! おなか、熱くて……あっ……だめっ……!」

セイバーの嬌声が響く。これだけ声を上げていると誰かに気付かれてしまうかもしれないが、今はもうそんな事はどうでも良かった。セイバーと一緒にイク事だけしかもう考えられない。

強烈に押し寄せてくる射精感を堪えながら、一心にセイバーの膝内を突き上げた。

「あっ、やっ、くうんっ! し、シロウ……もう、もう私は……」

さっきまでセイバーは絶頂直前まで感じていたんだ。長くは堪えられないだろう。

「あっ! イヤっ……だめっ……シロウ……あっ……お願いですっ……」

「……いっしょ、一緒に……」

「だ、いじぶセイバー俺ももう」

限界が近いと告げると、褲が外れたようにセイバーは一気に階段を駆け上った。

「はい、はいっ……来る……いやっ、もう……あっ!! いやあ」

「つ、あああああああつっつっ」

一際強烈にセイバーの膝が俺のモノを締め付けた。

それで俺の方も限界を迎える。貫くようなつもりで思いっきり腰を叩きつける。

「ドビュッ! ビュクッ……ビュク……ビュルル……」

二度、三度震えながらセイバーの一番深い所に全てを注ぎ込む。



「……はあ……あ……シロウの……膈内に……」

絶頂が止まらない。我ながら驚くほど大量の精液を吐き出した。

「……………あ……こぼれてしまいます……」

狭いセイバーの膈内はすぐに一杯になり、繋がったまま精液が溢れ出してくる。

狭い膈内では飲みきれないのに、セイバーの膈内は精子を搾り取るように、きゅーっとなんかのモノを締め付けてくる。

「……んう……熱い……溶けてしまいそうです……」

陶然と咳くセイバーを見て、強烈に愛しさが込み上げる。

と、同時に欲望もまだ収まらない。

すべて放出したにも関わらず、俺のモノはまだ衰える気配がなかった。

「……………セイバー」

目を細めて余韻に浸っているセイバーに声を掛ける。

「……………んう……はい？」

「ごめん。まだ足りないみたいだ」

「え？ ………………あ……」

そう言うと、俺の肉棒がまだ自分の膈内で固く屹立したままだという事に気付いたようだ。

「もう一回良いか？」

「……………しかたないですね」

口ではそう言いながらも、満更でも無さそうな感じで自分から足を開いてくれた。

抜かないままで、再びピストンを開始する。

「あっ、やっ……あん！」

ぐちゃぐちゃと音を立て、俺の出した精液とセイバーの愛液が交じり合った。

腰を打ち付ける度にその混合液が零れ落ちてくる。

「ほら、セイバーこんなに濡ってる」

手を伸ばし混ざり合った液を掬い取ってセイバーに見せた。

「舐めて」

目の前に伸ばすと、セイバーは素直に俺の指を口にする。

「……ちゅっ」

指先を這うセイバーの舌の感触が俺の興奮を煽った。

その光景を見て、

「もっ」と自分の証をセイバーの中に刻み付けたい

そんな事を考えた。

「あ……っう……固く……あっ!!」

一段と固さを増した肉棒でセイバーの膈内を抉っていく。

「だめっ！ そんなに激しくしたらすぐに」

構わず、ズン！と深く貫いた。

「……っああああ!!」

さっきイッたばかりの所にいきなり強烈な快感を叩きつけられたせい、セイバーの膈内はびくびく痙攣を続けていた。

そのままの勢いでピストンの速度を上げる。

そのまも何回も往復する度に、にちやにちやと音がするのがいやらしい。

既にセイバーは何度も体を痙攣させていた。

小さい絶頂はもう何度も迎えているのだろう。

だが、俺のものを締め付ける力はまるで手で握られているかのよう強い。

いつも凛としたセイバーの顔が快感に溶けていく。

「やっ、やっ……だめですシロウ……ンッッ！ ンッッ!!」

もっとその表情が見たい。

そう思い、より深く交わるためにセイバーの腰をくつと掴んで引き寄せた。

カリのあたりまで引き抜くと、一気に腰を入れる。

「あああああ!!」

子宮口に先端が当たる感触。

それとともに、セイバーの音が跳ね上がった。

「あ、当たって、当たって……ますっ！ ひゃんっ!!」

突き入れる度に子宮口に当たる感触が俺の快感も高めていく。

「あっ、シロウ……もう、あああ!! んううっ!!」

「つく……セイバーまた膈内に」

「はい、出して！ ください……シロウ……の、んうう！ 精液

……膈内に欲しいです……あうっ!!」

引きつけるように痙攣するセイバーの膈内に深くペニス突き入

れた。

渾身の力で腰を振る。

「ひゃうっ！ お腹が、痺れて……あ、あ、あ、あああ!!」

だめっ！ もうっ!!」

セイバーの音が絶頂に駆け上がっていく。

「シロウ、シロウ……来る……イクっ、もっ、イっちゃ……ああ
っ!! い、イクっ!イクっ!! ああああっっ……!!」

セイバーは絶頂の声を上げながら、体を逸らしていく。

俺は子宮口に押し当てたまま二度目の精を解き放った。

ドクっ! ドクドクっ! ビュルッ! ビュルルッ!!

「ああっ……あ、あ……熱いのが……お腹に……」

セイバーの子宮の中に精液を吐き出していく。

ガクガクと腰が震えるが、セイバーの腰を強く掴んで押し付け
て射精を続けた。

「あうっ、あ、あ……んっ……んっ……」

セイバーは絶頂の余韻を感じながら、俺の吐き出す精液を受け
入れていく。二度目とは思えないほどの量をセイバーの膣内に流
し込む。

ビュク! ……ビュクッ! ……!!

最後の一滴まで注ぎ込むと、セイバーの膣内からベニスを引き
抜いた。

その途端、ごぼりと音がしそうな程の量の精液がセイバーの割
れ目から溢れ出る。

「んっ……垂れて……」

無意識なんだろう。

股間に手を伸ばしたセイバーは溢れてくる精液をにちゃにちゃ
と掻き回していた。

うっとりとした顔で、白濁した精液を流し続ける自分の股間を
弄りっっている。

いつものセイバーとのあまりのギャップに目を離すことが出来
ないでいると、

「……ん……んう……れろ」

掘り取った精液をおもむろに口に運んで嚥下した。

「ん……おいしい」

「……」

ドクン——

二回にわたってあれほど吐き出したにも関わらず、俺のモノは
またも固さを取り戻していた。

いくらなんでも、回復の早さに自分でも不安になるが、こうな
ってしまえばもう考える事は一つしかない。

またセイバーと交わりたい。

「……セイバー」

「？」

まだ意識がはつきりしていないのだろう。目の焦点が合ってい
ない。

「セイバー後ろ向いて、お尻を上げて」

だが、セイバーは俺に言われるまま、後ろ向きになりお尻を突
き出した。

こうすると、二回も中に出されたせいでどろどろになったセイ
バーの割れ目のはつきりと見える。

その上にはセイバーの可愛らしいアナルが見えた。

ちよつとした悪戯心が沸いて、指先でそこを刺激してみる。

「あっ……んっ……」

僅かだが、確かに反応があった。

それに気分を良くしてこしょこしょと触る。

「……ん、あっ……あっ……」

ちよつとの刺激で敏感に声を上げるセイバー。

それが楽しくてアナルを刺激していると、セイバーがはつきり
と意識を取り戻した。

「あっ……あっ……ん……しろう? ……あ、えっ? どうし
てこんな……」

それと同時に俺はセイバーの膣内にベニスを突き入れていた。

「え? ひやうっ!? し、シロウ?」

「ごめん。セイバーまだ足りない」

「……」

「でも、セイバーが嫌ならもうこれ以上はしない。我慢する」

見上げてくるセイバーの瞳をじっと見つめてそう言った。

いきなり入れておいてなんだが、これは本気だった。

俺はセイバーを無理矢理犯したいんじゃない。

……本当だぜ?

「……そうは言ってもシロウのモノはまだカチカチですよ」

「…我慢する」

やせ我慢だった。

黙ってセイバーを見つめる。

「ん……んっ……」

と、ベニスを柔らかな刺激を感じる。

「……?」

小さくセイバーが腰を動かしていた。

「あつ……あ……うっ……」

呻つくりと、膣肉で俺のモノを撫でるかのようには腰を回す。

「せ、セイバー？」

「ん……あつ……大丈夫です、シロウ……私もまだ」

セイバーは肩で息をしながらも、健気に俺のモノを刺激してくる。

それで完全にやられた。

精神的な充足感で射精感も一気に高まってくる。

「——行くよ」

「はい。どうぞシロウ、来てください」

どうせ長くは持たない。

そう思い最初から勢いよく腰を振った。

俺の下腹部とセイバーのお尻が打ち合っばんばんと卑猥な音を立てる。ペニスに引張られてめくれるセイバーの髪が見えた。

「あつ！……はっ！……ああつ、すごい……さつきよりも……」

奥まで……ひうっ！

腰を引くとセイバーの膣内が吸盤のように俺のモノに吸い付いてくる。立て続けに二回も出して敏感になっているペニスにその刺激はたまらない。このままだと俺一人勝手にイッて終ってしま

いそうだ。

「くっ……セイバーッ」

「あ、ひやっ、んう……ふあ……深い……んうう……」

大きく動かすのをやめ、短いストロークで深い所を刺激する。

時折円運動を加えたりしながら責め続ける。

「やつ、それ……奥……こすれて……あああつ!! あつ!! ひやっ!!」

鼻にかかったような声が俺の部屋に響く。

「ああつ!! ……ん、んん……いい、きもちいい……くうん

っ!! はあ、はっ……んっ! あ……」

ぬるぬるとしてクセに、セイバーの膣内は俺のペニスをしっかりと握るように締め付けてくる。しかも、セイバー自身も快感

を得ようとお尻を振ってくるので、ますます俺の方には余裕が無い。

もう何往復もしないうちに射精してしまうだろうと確信する。

「ああつ、シロウ、シロウ……いつでも、好きな時に……」

そういうセイバーの声にも余裕は無い。

自分も快感に震えているクセに、そんな事を言うセイバーを見て逆に意地になった。

絶対一緒にイカせてやる。

セイバーの腰をしつかりと掴んで、より深い所を狙って突き入れた。

突き入れたペニスを奥で回し小刻みに突く。何度か繰り返した後引き抜いて入り口の周りをくちゅくちゅと刺激してやり、また深く突き入れる。

「あ、ひやあ!! あ、あ、あああ!!」

交わっている部分から、白濁した液体が押し出されこぼれ落ちる。ポタポタと俺の布団にシミが広がっていく。

「くうっ! ああ、あああああつ!! いやっ、つくう……あ、

イク……イってしまますっ!!」

よがるセイバーの声にも、もう何の余裕も無かった。

俺も一心にセイバーを責め上げる。

「んっ……ふうっ……あああ! だめ、もうだめっ! あつ……んくううっ!!」

もう技巧も何も無い。ただ深く求めるために、激しくセイバーの膣内に俺のペニスを突き入れる。

ちかちかと目の前が明滅する。もう俺も限界だ。

「セイバーっ!!」

「あ、あ、あああああつ!! 頭が白く……白くなって……イクっ! ……んうううっ……あんっ、やつ、も、もうっ!」

激しく嬌声を上げながら、セイバーの背中が反り上がって行く。その光景を見ながら俺は決壊した。

精液を放ちながら突き入れる。

「シロウっ、シロウっ!! あ、あああつ、あ、あ、あ……やつ、やあああ!! ん……んっ……ひやううううううっ!!」

「——七、イバっ!!」

「あああああ!!」
がくと、力が抜けてセイバーが前のめりに崩れた。
その弾みでセイバーの膣内からペニスが抜ける。
セイバーのお尻の割れ目に擦りつけながら射精を続ける。
俺の吐き出した精液が背中や髪に降り注いだ。
「はあ……ふあ……ん、んんう……」
ぐつたりと崩れ伏したままで、俺の精液を受け止める。



びくびくと絶頂の波に打たれ下半身を痙攣させていた。

「ん……………ん……………んんっ！」

一つ大きく震え、ようやく絶頂の波から解放されたセイバーが、こてんと仰向けに転がった。

「シロウ……………」

「ん？」

顔を寄せると唇を塞がれた。

セイバーの髪を撫でながら、しばらくそのまま唇を重ね続けた。

「折角風呂上りだったのに、また風呂入りなおしたな」

「そうですね……………一緒に入りますか？」

「魅力的だけどな、また襲いそうな気がする」

笑われた。

恥ずかしくなると、部屋の様子に視線を向ける。

「……………しかし我ながら、よくこんなに出したもんだ」

布団は精液やらなんやらでくちやくちやになっっているし。

「ふふ……………いくらサーヴァントとはいえ、こんなにされては妊娠してしまいそうな気がしますね」

「あ……………」

——受肉しているんだからあなたが可能性が無い訳でもないんじゃないか？もし子供が出来たらどうしようセイバーの子供だったらきつと可愛いに違いない——

咄囁にそんな事が頭の中を駆け巡り、

気が付くと口を開いていた。

「…名前」

「はい？」

「名前を考えておかないとな」

そう言う俺に少し驚いた顔をしたが。

「……………そうですね」

答えたセイバーは確かに微笑んでいた。

今こうしてここにいられる事がそもそも夢のようなものだ。

このままだけでも続くかのように見えても、本当は徐々に消える泡沫の夢。

お互いそんな事は解ってる。

だけど、有り得ないと笑い飛ばして終らしてしまうにはその未来は素敵過ぎるだろう？

先程までの交わりが嘘のように穏やかに語り合う。

たとえ覚めてしまっても夢だとしても、交わした想いだけは現実だ。

「……………何考えてるんだか」

「恥ずかしくなり、誤魔化すように勢い良く立ち上がる。」

「風呂行こうか」

「はい……………襲わないでくださいね？」

「努力する」

「努力する」

益体の無い言葉を交わしながら、セイバーの手をとり部屋を出た。

願わくは何時までもこんな時間が続きますように——

NAKAGAKI_02

ガチ触手！
01,02と散々触手を描いておいてなんですが
とにかく徹底的な陵辱をテーマにしたかったのがRE03でした。

丁度ホロウでタコの話が出てたんでコレ幸いと
好き勝手描着始めたものの、
タコ触手の面倒臭さに何度か泣きそうに…。

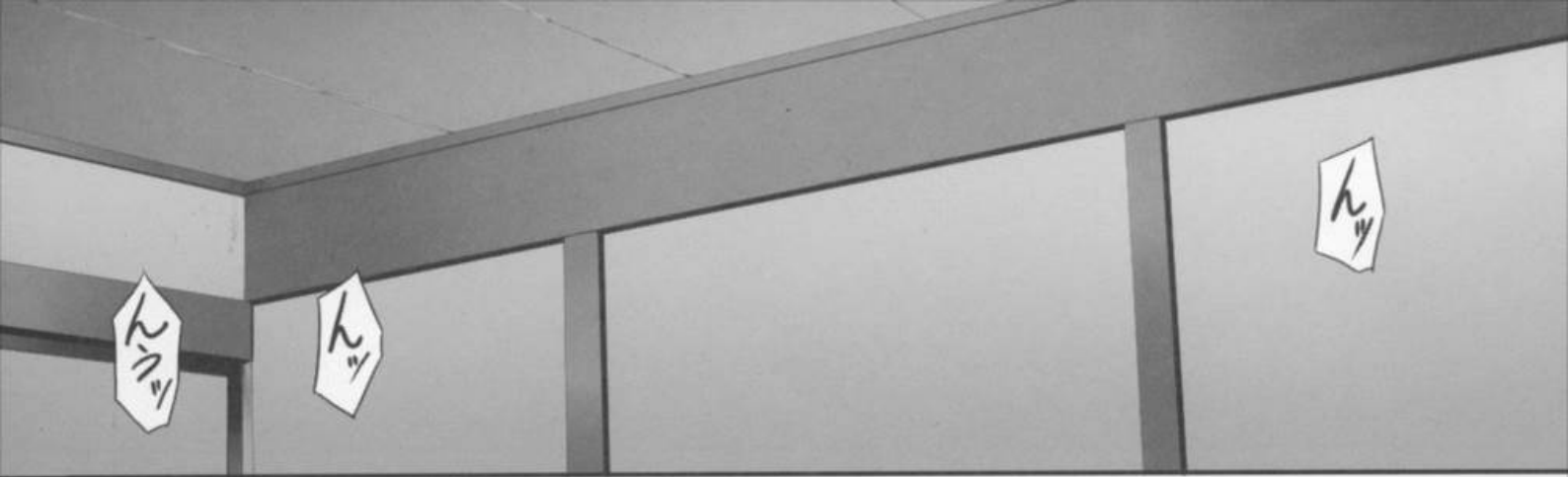
というか本編のエロがもっとネチヨネチヨだったら
こんな苦勞して触手描かなくても良いんだよ！
なーんて事も思った記憶が。

型月信者を自覚しておりますが
ことエロに関しては不満爆発です。

エログロは伝奇モノの基本だと思うんですがw

続きましてRE04をどうぞ









……ッ……!!……!……?……



……え……?……

あんまり
気持ち良く
なかったりする
……?……



いやさ……セイバー
あまり声出さないから……
どうなのかって……

な、な、な
なな何を言い出す
んです!?



最後の方はその……

喜んでくれてる
みたいで

遠坂も始める時は
ガチガチだけど



桜は割とこういう
の積極的だし、

あ、いや、
比べるとか
そう言うことじゃ
無いんだ。

ただ俺も、
その、

何度かしてもらってきて
経験値はそれなりに
溜まって来た気がするけど、

でも上手いか
どうかなんて
わかんなくて、

その、セイバーは…

あんまり感じて
もらってないのかなって
不安になったんだ…

し、シロウは…ッ

シロウは…

よく…
してくれています…



ホントにッ?

いっ

ひゃう!?



え、セイバー...?

す、す、すいません

急に動かされたから...つい



.....こと
気持ちよくて
声が出たって事...?

ドキ...



こ、怖いんです！

それなら……

コク……



変わってしまったのが
怖いんです…

…え？

シロウ達が言う通り
この時代に
サーヴァントとしての
存在も生き方も
必要無いのはわかります

快樂に声をあげ、
流されてしまえば
これまで
騎士として
生きてきた自分から
変わるでしょう…

けど…

私はきつと
はしたなく腰を振り
涎を垂らし、

貪欲にシロウを
求めるだけの
あさましい女に
変わってしまう…

そんな私を見たら

きつとシロウは…

嫌いになると
でも？



!?



んんん

んんん

んんん



あ、やっ!?

シ、シロウ!?

はっ はっ!
ふはっ!



ホント作って良かったって思える

美味しいモノを美味いって言うってくれるセイバー見ると、

こういうのも一緒に



な、何の話...

ジュジュ...



.....俺はさ

ゴハン食べてるセイバーって好きなんだよ？





気持ち良いって
言って貰えたら
本当に嬉しいんだ

嫌いになんて
なるもんか



間違いなく
もっと好きになるよ

……
ツ

ドキッ



その証拠にほら、

オレの、
セイバーの中で
どうなってる？

あッ……

あッ



その、
か、硬いです…

それだけ？

う、あ、

いえ、その、

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン



あ、熱くて
脈打って…

さ、さっきした
ばりなのに…

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン



と、とてもツ
元…気ツ…ですツ

だろ？

Hなセイバーが
好きじゃないなら
こうはならないよ

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

だから
聞かせてよ
セイバーのHな声

はうッ！
あッ、深ッ!?

ひっ
だ、だめ、
ダメですッ！

はあッ！

シ、シロウッ
おねが、

ああ、だ、め
おかしくッ

おかしくなッ
るッ、ああッ

ああああッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

可愛かったよ
セイバーのイクとこ
惚れ直した

わんっ...

わんっ...

あッ

はッ

ふあッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ



でもね

あアツ!?



これくらいじゃ満足しないよ

もっとセイバーと...

今まで散々焦らされてきたんだ

あ、ああ



ああ

あ

ずずず

ずぼ

あ

チュッ

ふあ

んあ

ズ

ズ

ズ



イイツ、くツ

ん

イク、また、
ああ!?

とまらにやツ、
とまらにやい!?



ぐんぐん
締め付けてくるツ

イキっぱなし
なのに
セイバーの!!!

凄い…

んあああ
ああっ!!!

ず
ちゅ

ず
ちゅ



わらひ、のッ

にや、かあ



さすがに
俺も…ッ

あ、あッ
く、くひひちやん



い、いせさー…

ああ、いくよ
セイバーッ！



ふあ、くる！
来ちゃうッ！

凄いの、
ッあぁあ！

ふあ

ドブ
ズ

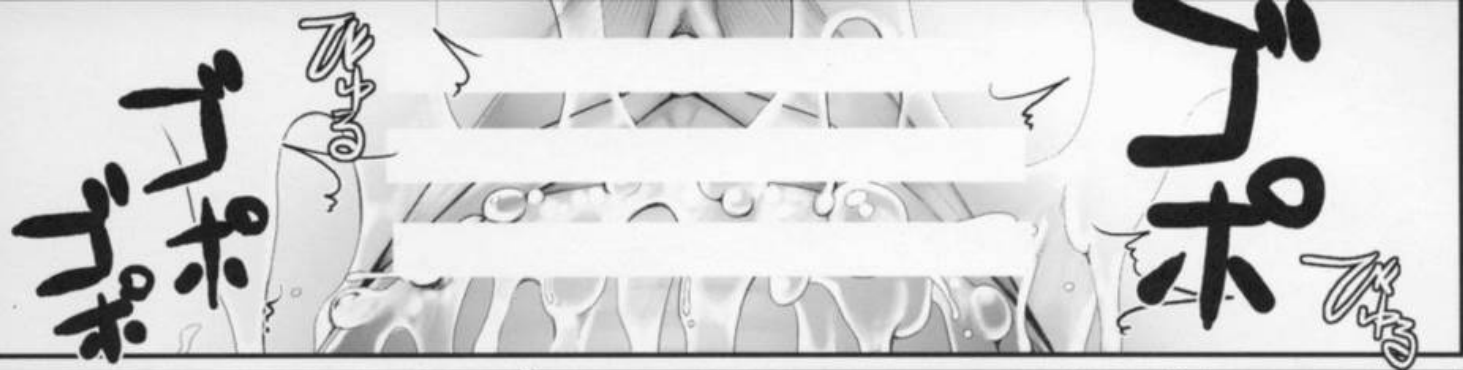
ドブ

ドブ

あぁあ
！

びしょ

びしょ





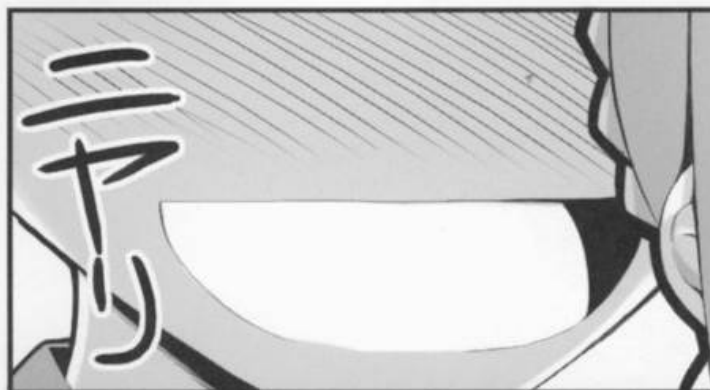
おち、

んち…



何を？

しろ、ウの、
はふ



あ、え、ち、違います
そんな、わたし！

よおしッ
じゃあもう
1ラウンド…！

ちよ、待ってください、
ダメ、ダメですって

ふあ!?

シロウ!!
本気で怒り、んう!?

ひやう、んあ、
ダメ、
あッ、ああッ、

んあああッ！



「まるでケダモノです…」



穴埋め。
丁度この原稿描いてる最中に
某ローションマンガを読みまして
面白かったのですが、どうもローション具合が
足りない感じだったのでぶっかけ。

というか、いつかローション漫画
描きたかったのに、先を越された感じでちょっぴり
悔しい、きいいいッ



穴埋めーッ。ああ、何か文章の後半に「ーッ」とつけると微妙にエロくなるような。アーツ。
本当は今回、イラスト本にしようと思ってたんだけど色々思うところあってボツ。
その名残の温泉セイバーさん。ここで使わずに年賀状にでもした方が良かったかな…。



使いまわしその2。次に Fate 本作るとしたら、そろそろ遠坂さんが酷い目に合うようなマンガを……。



使いまわしその3。この年の残暑見舞い用に書いて、RE04では奥付にうすぼんやりと使っていました。
夕日の海をバックにした絵は良く書いてますが、多分描けるとしたら来年もこの構図になりそうです(苦笑)

NAKAGAKI_03

それまでの触手路線から路線転換した04。
まあ普通のエロ同人ですね(苦笑)
ただ、エロの表情に関してはこっちの方が良さそう。

アヘ顔も好きですが、アクセントくらいに留めておいて
基本は普通のエロい顔にした方が良さそうですねw

あれは描いてる内にワケわかんなくなります…。

続きまして書き下ろし。
50Pを超えるハードな陵辱の
あとの展開とか思って貰えると
助かりますw



頭から
つま先まで

べとべとの
ぬるぬるで
アへ顔晒して

おっぱいは
垂れ流し

お尻やお口
どころか

腋だけでも
イけるように
なって

あげくに
そんなブタ
みたいな
お腹になるまで
お肉を詰め込んで
あげたのに

これ以上って…

どこまで
食欲なんです？
セイバーさんは

ひ、ひがうつ

ひがう
ひがうウツ！

こんにやによ
いやツ！

もう
やああああ！

ふふ大丈夫
わかつてますよ

ごめんなさい
セイバーさん
可愛いから

なつい苛めたく
なつい

もうオマンコ
ガバガバで

その子達
だけじゃ満足
できませんよね

だから…

がッ!
ああッ!?

陣痛アクメですよ
お腹の奥から
ジンジン
来てるでしょ?

なに、
これえ!?

にや…に
…ッ!?

けどそんなの
前振りみたいな
もので



今まで
いつてきた事が
震んじやうくらい

ここから
気持ち良
くなるん
ですよ



やっばりメスの
本能として

深いところ
に刻ま
れてるん
でしょ
うね



母親に
なる喜びが

!?

あーん



いやあ!

いやいやいや
いやッ

ツああ
あああ!?

そんなに
慌てなく
ても
大丈夫



びびる

びびる

凄く凄く

こんな大きな子
私でも産んだ事
ありませんよ

びびる

びびる



あー♡

あー♡

ぐわ

ぐわ



ふふ
良い声……

ほんとに
気持ち良い
んですね

あー
ぎゃう……

さてと
私は姉さん
見てきますから



しばらく
親子水入らずで
楽しんで下さいね？

それじゃ、
ごゆっくり

あー♡

あー♡



NAKAGAKI_03

そしてセイバーさんは触手に囲まれて
いつまでも幸せに暮らしたとさ。
もうセイバーさんで触手モノ描く事は無いと
思ってなかったんですが、
そういや出産モノは03のラストで少し描いたくらいだったなー、
なんて思ってたらしい…。

さすがにもうこれ以上は…とも思うんですが
来年発売されるエクストラに触発されるかもしれません(苦笑)

女主人公とセイバーさんの百合触手的な展開に
持ち込めたらステキですが…。

続きましてRE02をどうぞ





ジュエル…
シード…？



これは…



ああ、ユーノに
頼まれてね
研究資料として
持ってきて欲しいって

全く

ボクを使い走りに
するなんて
いい度胸している

でも危険じゃ
ないの…？

封印はしてあるし
よほど強い魔力と
想いを込めなければ
大丈夫



キラ…



ああ

いいの？

触ってみるかい？

これがきつかけで
なのはと出会って
もう1年か…

色んな事、
あったな…

なのは…

ク、クロノ君ツ!?

うわーぎゃー



それにフェイトの魔力…



妹になる子に本気を出すわけにはいかない



凄くやる気ない声だけど、だ、大丈夫？

しようがないだろッ



かといってスターライトブレイカーなんて使ったら…

封印の魔法は通用しない



ジュエルシードで増幅されてる



簡単だよッ



ど、どうしたらいいの!?



フェイトちゃんまで…



ユーノくんツ!?

願いを
叶えてやればいい!



多分なのはと
一緒になりたい
んだよ



動きを見てると
彼女はなのはを
集中的に狙ってる



ふわあツ!?

一緒って
どういう...



なのはは
フェイトの事
好きなんだろッ!?

あ、あたりまえだよ



落ち着いて!

姿は変わっても
フェイトである事には
変わらない!



よし、
なら大丈夫

へたに
抵抗しないで
受け入れ
るんだ



ガンバレ
なのはッ

君の痴態もとい
雄姿はちゃんと
見守っているからッ!

ふえええっ!?

なの…は…

きやんツ

カクツツ

あ…
フエイト…ちゃん

なの…は

ズツ
ズツ

や、そんなツ

ぬ、脱げ
ちやうよおツ

な、なに？

はう！？



こんな格好
ダメなのに…ッ！

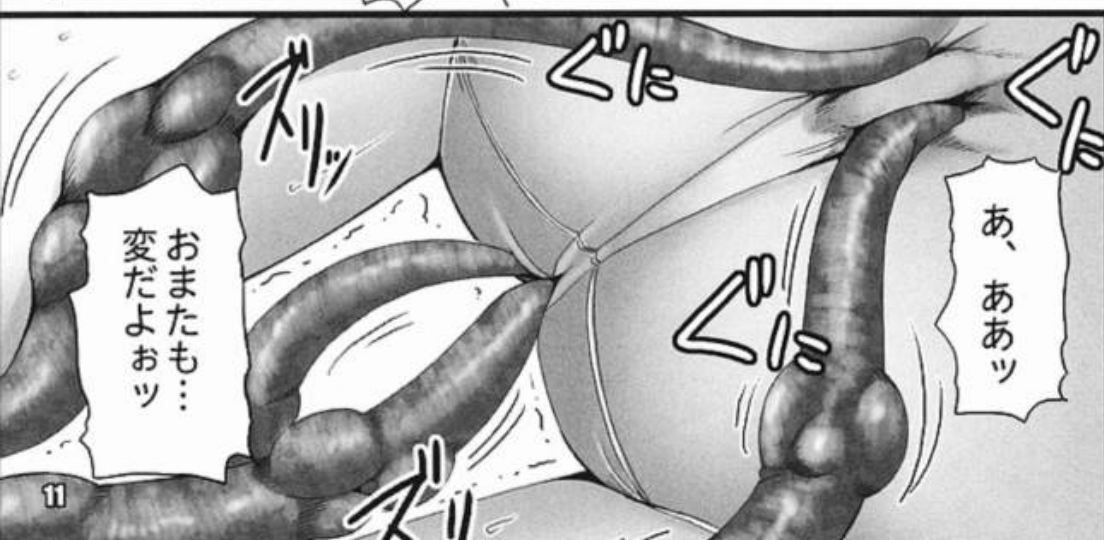
やあんッ
ダメ…ッ
ダメなの…



ッあん

ダメ
引っ張っちゃ
ダメエッ

お胸ッ…
ジンジンしてッ



おまたも…
変だよおッ

あ、ああッ



は、ふああ

何か…
変…なの…



やああああッ!



あ、だめッ

ダメダメッ



ダメなのに

ズル



あッ

ああッ

ああッ!?



うッ
あんッ

ひゃんッ

ジンジンするッ
ジンジンしてっ!





ツあー!!
ああああッ!!

ちゅっ

ギギギ

ギギギ



ツああー!!

あああッ!



ズッ

ズッ

ズッ

ズッ



けど
大丈夫だよ

痛い？

あ

あ

あ



私も母様に
痛い事されたけど

すぐに



だから
なのはも…



気持ち
よくなったから



わらひ変なの…

変…なの



ぷはッ！

ふあッ
ふえ…ちや…



ぞくぞくッ
して…ッ！

けど…
熱くて…うッ

急に…
ふわふわって…
してッ



うん…

頭ッ
まっひろにッ

泣いてるなのはも
いいけど…



うん…

ふえい…と…
ひゃんッ…



なのは……

ふあ……

ふえ……
いと……ちゃん……

ハア

ハア

ハア



ん……

フエイト……
ちゃん……



でも……

良く……
覚えてない
けど……



ゴメン……
迷惑かけちゃった
みたいで……

気にしないで
私も皆も無事
なんだし



なのは……

……

フエイトちゃんが
私に酷い事する
はず無いよ

いくら
ジュエルシードに
支配されてても

もうフエイト
ちゃんったら

なのはに凄く
酷い事したような……

さ、しっかり休んで
元気になってね

フェイトちゃん
がいなくて
私も困って
るんだから

え？

あれからね

ずっと…

ジンジン
するの

お胸も…

おまたも…

だから早く
元気になって…

また、しよ？

「No. 10」

小説：高橋良樹
挿絵：無望菜志



「この……だっ子！ 言うことを……聞け！」

フェイトは爆煙の中から飛び出しながらそう叫んだ。そのまま黒衣の魔法少女は空を切り、神速のごとき素早さで闇の書へと突進する。金髪のツインテールが水平になびくほどの速度だ。防御力を極限まで削り、一撃必殺のスピードにかけたソニックフォームであるからこそ可能な速攻であった。

本当なら、こんな実力行使などしなくなかった。話し合いのうちに解決できることもある。闇の書は自身を「道具だ」と言い切った。感情など無いと、言い切った。しかし道具は涙を流さない。それは明らかに感情を持った一人の人間としての反応なのだ。ならば、話し合いが出来ないはずはない。

(だけど……)

宙を舞いながら、フェイトは一瞬自分の過去を思い出した。言葉は確かに心に響く。それは間違いない。なのはの誠意ある言葉は次第に心に染み渡り、今では彼女と自分は無二の親友となった。しかし、戦いの中でしか分かり合えないこともある。自分と相手の力をぶつけ合い、認め合ってこそ出来る理解もある。

(なのはと私が、そうだった……)

それを知っていたフェイトは、微かな葛藤を胸に秘めたまま闇の書へと接近する。今はこうするしかない。頑なに閉じられた心の鍵を一度打ち壊し、言葉を心に届かせるにはこれしかないのだと。

かわいらしさの中に凛々しさと、決意を秘めた表情を浮かべて更に闇の書へと飛びかかっていく。

黒いスパッツ状のバリアジャケットに包まれた身体を柔軟にひ

ねり、小さな手のひらにはめられた黒の指ぬきグローブに包まれた手に強く握り込まれた信頼できる相棒、バルディッシュ・アサルトを大きく振りかぶった。

しかし、闇の書は動じずにデバイスを開いた。

「お前も、我がうちで眠るといい……」

それと時を聞けず、フェイトが裂帛の叫びと共に闇の書に撃ちかかる。

「はああああああっ……」

「がきいん!!」

バルディッシュ・アサルトから伸びた光の刃は、闇の書の眼前に張り巡らされた紫色の橋光を放つベル方式魔法陣のシールドにより阻まれた。硬質な音が閉鎖された空間に響き渡り、火花にも似た魔法の残滓がシールドと刃の間で飛び散る。

「っ……」

まるで鉄板に斬りつけたような感触である。思いの外硬いシールドから跳ね返ってくる衝撃に、フェイトの全身が痺れる。秀麗な眉が軽い痛みに至み、ルビー色の瞳がきつくつらられる。しかし、フェイトはそれにもめげずにシールドを穿とうと更に力を込めた。黒いバリアジャケット越しに見える小さくて可愛らしいヒップがきりりと引き締められる。

「っ、く……!!」

ぎりぎりぎりつと一点突破を狙ってシールドをこじ開けようとするが、びくともしない。元々パワーよりは速度を生かした一撃離脱方式タイプのフェイトとしては、この状況は有利とは思えない。

しかし、「この娘は、昔の私の姿なのかも知れない……」という闇の書の過去の自分にも似た境遇に複雑な心境を抱いていたフェイトにとつては、このまま諦めることはできなかった。それが歳

に外れて優秀な黒の魔法少女の戦闘センスに、多少の影響を及ぼした。そして、それは致命の一瞬となる。

「ふん……」

表情一つ変えずに闇の書はデバイスをぐつと前に押し出した。

「がきいん!!」

「うわっ!!」

それほど力を入れたようには見えなかったが、シールドの押し出しはフェイトの身体を易々と押し返し跳ね飛ばしてしまう。金髪の魔法少女の小さな身体が、無防備な状態で宙を舞った。その瞬間、

「ごがあっ!!」

コンクリートの裂け目から再び飛び出してくる無数の触手。それらが宙高く舞うフェイトの黒いバリアジャケットに包まれた肢体に殺到した。

「うっ、ああっ!!」

しゅる、しゅる……!!

先ほどにも倍するような触手の群れであった。空中で完全に体勢を崩していたフェイトにそれをかわせようはずがない。肉組達はあるという間に魔法少女のスレンダーな肉体を戒めていく。両手は頭の上でバンザイをするような形で固められ、更に手にしていたバルディッシュ・アサルトの柄を肘に抱え込むような形にしてつつかえ棒にされ、完全に拘束されてしまう。

「くうっ……」

信頼できるデバイスの硬質な感触が触手の締め付けでぎりぎり
と少女の抜けるような白い肌に食い込み、強い痛みが走る。凛々
しい少女の瞳が苦痛に歪んだ。

触手達は更に露出した両脚に、そして黒いスパッツのようなバ
リアジャケットに包まれた太股にはいずり寄るようにして近寄っ
ていった。触れれば折れてしまいそうな華奢な両脚は、今まで幾
多の魔法戦を繰り広げてきた歴戦のエースとは思えぬほどに白く、
ほっそりとしている。少女らしく繊細で、優美な美しいラインで
ある。そのおみ足に触手は蛇が獲物を捕らえるかのような動きで
巻き付いていった。

肉縄にはめめりが無く、文字通り縄のような感触である。それ
が故に、巻き上げられる過程で生肌を強く擦過されると、肌がひ
りひりするような強い痛みを覚える。それでも力加減が絶妙なの
か、動きは封じるものの擦りむけたりはしなかった。

だが苦痛なことには変わりなく、荒縄で肌をやすりがけされる
ひりひりする痛みと、摩擦熱に苦悶する。顔からじつとりと脂汗
が流れ出し、形の良いおちよぽ口から苦鳴が漏れ出した。

そうしておいてから、両脚に巻き付けられた触手がぐいっとフェ
イトの両脚をそれぞれ右、左と反対方向に引っ張っていく。

「あうっ、くうっ……」

必死に抵抗しようとスパッツのようなバリアジャケット包まれ
た内ももを筋張らせて懸命に力を入れるが、魔法生物である触手
達の力にかなうはずもない。どんどん強まる張力にフェイトの股
関節がぎしぎしと悲鳴を上げ始めた。

「んっ、んんん……ああっ……」

美少女の顔が苦しげに歪む。とうとう踏ん張りきれなくなり、
フェイトの両脚がぐつと大きく開かされた。

「こ、こんな格好……」

俗に言うM字開脚の姿勢にさせられ、まるで幼児に用を足させ
るときのようなスタイルで固められてしまった。自然腰が少し前
に出るような形になり、「おしっこの穴」がある恥すかしいところ
を強調するような感じになってしまう。身体に吸い付くように密
着したバリアジャケットがフェイトの割れ目に食い込み、うっす
らと小さな穢じわを産み出していた。

「くうっ……」

気丈な魔法少女もさすがにこの姿勢には強い屈辱感と羞恥を感
じる。ピスクドールのような白い顔がぼつと朱色に染まってい
く。

「フェイトちゃん!!」

悲痛な叫びが下から聞こえた。親友の窮地に飛び出したなのは
である。両脚にフライヤーフィンの赤い鱗光を纏わせ、コンクリ
トを蹴って宙を舞う。

「……」

闇の書は見向きもせず赤いラインの走った片手を白の魔法
少女に向けた。その途端、コンクリートの地面が裂けてまたして
も妖しげな触手が飛び出したではないか。フェイトの身体を成め
ているそれと同一の肉縄達である。

「きゃあっ!!」

急いで空中に逃げようとするが、一瞬遅い。しゅるつと一本の
触手が足首に絡みついた。獲物を捕らえた肉縄はなのはを地べた

へと強引に引きずり下ろした。

「あうっ!!」

完全に体勢を崩してしまい、まともな受け身もとれないままに
コンクリートの固い地面にお尻から叩き付けられるようにして落
下してしまった。バリアジャケットのおかげでそれほど痛みは
なかったものの、尾てい骨をしたたかに打ったためなかなか立
ち上がれない。

そうこうしているうちに、先ほどの拘束など問題ならぬほど
の量が純白のバリアジャケットに包まれた小さな身体に殺到した。

「あうっ、あああ……」

得体の知れない生物にまわりつかれる気色悪さに、なのはは
鳥肌を立てて叫び声を上げた。栗毛の髪を打ち振ってレイジング
ハートエクセリオンを振り回すが衆寡敵せず、魔法を使うヒマも
なくあつという間に全身を黄巻きのように縛り上げられ、身動き
一つ出来ない状態になってしまった。

「あう……闇の書、さ……」

全身がギリギリと強く締め上げられ、息苦しい。それでもなの
は呼びかけを止めない。そんな純真な魔法少女の言葉に闇の書
は軽く眉をひそめた。そして更に触手を操る。

「ううんっ!? んくっ!! ……あう……」

なのはの首に巻き付いた触手がぎゅつと締まったのである。頸
動脈が一瞬で圧迫され、少女の意識を奪いさる。いわゆる「落ちた」
という状態である。気を失った魔法少女の小さな手からレイジン
グハートエクセリオンが滑り落ち、ついで全身を軽く痙攣させな
がら頭がかくんと落ちた。ツイントールがそれにつられるように

ばざりとしなだれる。

「なっ、なのは、なのは？」 なのはをに何をしたんだ!!」

親友の突然の沈黙にフェイトは動転し、目を吊り上げて怒鳴った。怒りにまかせて全身をじたばたともがかせて触手の戒めから逃れようとするが、強固な肉縄は全くびくともしない。魔法とバリアジャケットを身に纏い、ある程度は力も強化されているとはいえやはり年端もいかぬ少女である。ましてやフェイトはスピードタイプ、触手との力比べでは圧倒的に分が悪かった。

あがくフェイトを見据えた闇の書は

「少しの間眠って貰っただけだ……。全ては、主の願い。主が愛した騎士達以上の苦しみを与えて、破壊する。まずは、お前からだ……」

と告げた。流れ続けていた涙は止まり、今はどこか冷酷さすら感じさせるほどの無表情へと戻っている。

それでも、彼女は先ほどまで涙を流していた。自分を道具であると言いつつ切ったが、確かに感情を見せたのである。フェイトは説得を諦めようとはしなかった。

「シグナム達を傷つけたのは私たちじゃ……。んくうっ?」

しかし、闇の書は聞く耳持たぬとばかりに皮ベルトに包まれた腕を振った。

その途端、再度の説得の音が上ずった叫びに変わった。胸のあたりを突如として走った、ヒリッとした不思議な感触。

何事かと思えば、身体中に巻き付いている触手が妖しく蠢き始めているではないか。ソニックフォームは上半身から下半身までスパッツのような密着したバリアジャケットであるため、フェイ

トのまだ青い果実のような肢体がくつきりと露わになっている。

發育途中であるが、可愛らしい胸の膨らみ。乳房、いや、おっぱいのかわいらしさを上と下の所でまかれた二本の赤ベルトが強調しているように見える。

そしてなだらかで、どこか引き締まったような印象を与えるお腹。ここもまた黒衣の魔法少女が身に纏うバリアジャケットの特徴である太いベルトが巻かれている。そのためには目には見えないが、下では可愛らしいおへそのくぼみすらがくつきりと浮かび出ている。

スピードを得るためのソニックフォームである。そのために余計なマントや防具類はついておらず、装着者の動きを阻害しないためにバリアジャケット自体もびつちりとスレンダーな肉体に張り付いている。

しかし、今回はそれが悪い方に出してしまった。

しゅるん……

漆黒のバリアジャケット越しに薄く盛り上がる両乳房に異性物が絡みついてきた。發育途中のなだらかな丘のふもとを円を描くようにしてなぞり上げている。

「な、なにをっ……。んく……」

最初に感じたのはくすぐったさであった。まだブラジャーを着ける必要すらないほどの小振りな胸は、もちろんだれにも触らせたくないなどない。そんな場所をいじりまわされているという事

女の子として、恥ずかしい場所をいじりまわされているという事実にフェイトの抜けるような白磁の顔にほっと朱が指した。

幾度か擦られているうちに、段々単純なむず痒さではない何か

が胸の内に産まれた。胸の奥がぼうつと熱くなり、段々じんじんとした自分でもよく分らない不思議な疼きが高まってくるのだ。それは決して不快な物ではなく、むしろ気持ちいいと言えるような感触。

触手の先から生えた三本の爪がすいっ、すいっとなを掻くように乳房の周りを動くと、バリアジャケットの裏地の滑らかな感触も手伝って、びりっびりっとした暖かい疼きがどんどん高まっていった。温かみはどんどん乳房の奥へと収束し、まだ可愛らしいおっぱいの頂点で、ぐくり、と小さな乳房が屹立する。

「お、おっぱい……。あつたかい……」

今までに経験したことのない不思議な感触だった。何となく全身が重く気だるくなつていき、その代わりに奇妙な心地よさが充満する。

「やうん……。く……」

思わず鼻にかかった熱い吐息を漏らしてしまふフェイトである。険しい表情は徐々にではあるがゆるみ始め、吊られていた瞳がゆっくりと下りていく。

触手の先端はゲームセンターのプライズマシンのキャッチャーのような形をしており、三本の爪が生えている。その爪が、黒いバリアジャケットごしに肉丘をぶにゅぶにゅと揉み込み始めた。

「ぶにゅっ、きゅっ、くにゅう……」

「ん、くらんっ?」

若々しい張りをもった肉の丘に爪が食い込む。一瞬ちくりとした痛みを感じたが、それもすぐ収まった。代わりに、むず痒さと

紙一重の妖しい心地よさが胸一杯に拡がっていく。幼いながらも性的興奮に張りつめ始めた乳房を、触手は徹底的に揉み込んでいった。抜群の弾力を持った乳肉がへこみ、そして元に戻りを繰り返す。その度にフェイトは

「はん……んう……」

と熱い吐息をこぼしてしまい、ソクソクツとした感触に身を震わせてしまうのだ。

胸の中に充滿していた熱は胸乳を揉まれることで更に高まり、小さな胸に入りきらなかった熱量はお腹の奥へと溜まっていく。おへその下辺りが、急にぼうつと熱くなってズクンズクンと今まで感じたことのない疼きが産まれる。

「はあ、は、ふ……」

（なんだ、これ……。魔法、なのか……？）

とろんと下がった目尻の端に涙を浮かべたフェイトは、そんなことを考えていた。まだ年端もいかぬ少女である黒衣の魔法少女には性的知識もない。自分が今感じているのが快感だという意識もなかった。

だが身体は正直なもので、バリアジャケットに包まれていない腕や太股から下に珠のようなほの香る汗がぶつぷつと湧きだし、気持ちよさに身悶えるたびにきらきらと舞い散っていく。閉鎖空間の一部に少女のレモンのようなフェロモン臭が漂い始めた。

「ん、く……」

（耐え……なきや……。なのはが、はやてが……！）

ともすれば身を任せてしまいたくなるような、ぬるま湯につかったような快感。しかし流されるわけにはいかない。今自分の身に

加えられているものがどんな魔法であれ、愛する親友と、新たな友達を救うためには絶対に負けられないのだ。

フェイトはじつとりとした汗に濡れた指めきグロブに包まれた両手と、鉄のシューズの中で突っ張っていた両足指をキュッと丸めた。そして、半ばまで垂れ落ちていた目尻を再び吊り上げる。

「こんなことしても、なんの解決にもならない……！ お願ひ、はやてを……」

必死の説得も聞かぬ書には届かなかった。返礼代わりに触手爪がバリアジャケット越しにも分かるぐらいいびんびんにしこり立った乳首を弾いた。

「ひうっ！！」

ピンッと弾かれた途端に電流のような痺れを感じた。一瞬脳内でパチパチと白い閃光がスパークし、身体が勝手にギクギクつとのけぞり返ってしまう。金色の美しい髪がさらつと流れて、紅潮し、汗の湧き出る頬に幾筋かはりついた。

（おっばいが……へん、だ……）

鼓動が今までの戦闘でもなくくらいに強く、そして早くなる。胸とお腹の下から産まれた火照りは全身にまわっていき、露出した二の腕と太股から下の足がさあつと桜色に染まっていった。

更に触手は間断なく責めをつづけた。今度は触手爪のベースに当たる卵状の部分を、充血乳首に押しあてる。

こりっ。

「きやうー！」

その瞬間に強烈な快感が閃き、脳で稲妻の如く炸裂した。身体が先ほどよりも強く弓なりにしなり、図らずも胸を突き出す格

好になつてしまう。そんな「据え膳」になつた状態の美少女を触手は見逃さない。乳首に押しつけた卵部分を軽くパイプレーションさせながら右へ左へ、くきくきと敏感肉突起を折り曲げて小指の先ほどもない快感器官をいじめ抜いた。そのみならず、張りつめた乳肌を爪が優しく円を描くようにしてくやくやくと揉み上げるのである。乳首と胸から送り込まれるダブルの刺激が狂おしいほどの快感電流となり、フェイトの全身を駆けめぐって美少女の肉体を芯からとろけさせていく。

「はうんっ！ くうっ、ひ！」

何度も何度も乳首から発生する快感電撃がフェイトの胸を焼き、そして腰を焼く。

フェイトの口から甘い悲鳴が漏れ、漆黒のバリアジャケットに包まれた肢体がカクンカクンと強く揺れた。耐えるように硬くつぶられた瞳からは隠しきれない随喜の涙が浮かび、頬を濡らしていく。体表面から無数に湧き出る美少女の甘酸っぱい汗が全身をしつとりと濡らし、防護衣の黒がより一層濃くなった。

さらにもう片方の乳房には違う責めが加えられた。これもまたバリアジャケット越しにくつきり見えている乳首を三本の爪で抓んだのだ。そして、きゅいつとひねり上げる。

「ひうっー！」

一瞬息が詰まった。最初は痛みなのだが、すぐにそれが心地よさに変わってしまう。直接の責めではなくて、防護衣一枚越しなのが幸いした。直接だったらおそろしく強烈な痛みを感じたであろう。

だが布一枚挟むことによつて刺激は幾分かマイルドになり、そしてバリアジャケットの内布で滑らかに擦られて心地よさへと変換

されるのである。さらりとした魔法衣の感触は極上のシルクのように、くすぐったくもあり気持ちよくもある。そんな布でぎゅうぎゅう敏感な充血乳首を圧迫されるのである。

「お、おっぱい、もう、やめ……」

紅潮し、切なげな表情でそう言うフェイトにはまた年端もいかぬ少女とは思えないほどの色香が漂っていた。しかし主の願いを叶えようとする間の書は当然そんなことを受け入れるはずがない。更に激しく乳首を撻り倒す。

今度は根本から爪を食い込ませ、つまみ上げるようにして責める。きゅうつと引つ張り上げられる乳首に吊られて、乳房も一緒に持ち上がった。

「い、痛あつ……」

だが、ただ痛いだけではなかった。苦痛の中に潜むわずかな快感。それは乳首を引きちぎらんとばかりに強烈に引つ張られると更に増大していく。激しく強烈な刺激がどこか気持ちいい。引き延ばされ、爪を食い込まされた乳首にはじけ飛んでしまうようなほどの熱い疼きが発生し、もつと強く、そしてきつく責めて欲しいような気分にならなってしまうのだ。それを示すかのように、触手爪の苛烈な責めの中にあつて乳首は更に硬度を増し、バリアジャケットを貫きとおさんがばかりに完全勃起している。

「こ、こんなのって……」

たまらなかつた。未知なる感触に全身がかつかつと火照り、いまや汗みどろである。間断ない責めを受け続けているおっぱいと乳首、そして股間が最も熱く、燃えたぎるようである。フェイトの割れ目は執拗な乳肉撻りにあつて、大人としての反応を示そうと

していた。

すなわち、愛液の分泌である。むずむずしてしようがない股間に、じゅくりとした微妙な湿り気を感じる。

「汗が……股間に……?」

その部分をおしっこをするときの穴、としか認識していないフェイトの性知識ではそのぐらいの判断がせいぜいだった。しかし、奥から微かにこぼれ始めた物はもちろん汗ではない。少女の濃いフェロモン臭を漂わせる愛液は、ピッチリ閉じられた秘裂からとろりとこぼれだして、スパッツ状のバリアジャケット股間部に吸収される。湿り気を帯びた布地は魔法少女の股間により強く密着し、タテスジがはつきりと浮き出してしまっていた。

数本の触手が、強烈な性臭を放ち始める股間へと忍び寄っていく。そして、目的地に到達するや否や、二本の触手がスパッツ越しに浮き出ている割れ目の左右両端に爪を引つかけたのである。

「うあつ? そ、そんなところ、は……!」

もちろん誰にも見せたことのないおしっこの穴である。ましてや触らせたことなどあるわけもない。そんな大事な部分がおぞましい触手に触られているのである。途方もない恥辱行為から逃れようとボニーテールを打ち振って悶え始めた。しかし、そんな分からず屋を律するかのように胸を責めている触手が乳首を爪でカリッと掻いた。

「ひゃうつ!!」

若干強い刺激であつた。乳首が破裂しそうな程の心地よさが爆発的に走り、フェイトの全身がびくびくびくつとのけ反つてしま

そうして魔法少女の動きを封じてから、間髪入れずに股間の触手が左右反対方向へと割れ目を引つ張つた。

くはあつ……

「つ……!!」

とうとう少女の秘められたる部分が糸を引いて大きくくつろげられてしまった。バリアジャケット越しではあるものの、汗とぬるぬるした液でびったりと張り付いてしまつており、その姿がほとんど透けて見えてしまつている。防護衣が完全に身体にフィットする構造だつたのも災いしたようだ。

「私の……大事なところが……」

極限の羞恥にフェイトの白磁の肌は火を吹かんがばかりに紅潮した。くなくと身を揉んで何とか隠そうとするが、宙に浮かされ、さらに両脚を固定されている状態では無駄な努力でしかない。

執拗なまでの乳房責めで充分煮えたぎつた子宮から送り出される生命のスープは止めどなく流れだし、スパッツ状の部分にどんどん溜まつていく。やがて吸水容量を超えて黒い布地からしみ出し、たらーつと糸を引きながら地面に落ちて恥ずかしい池を作っている。

「な、なんだ……これ……おしっこ、でも、ないし……」

困惑してしまうフェイトであつたが、何となく「恥ずかしいことだ」ということは理解できたようだ。女としての本能的な物であらうか。恥ずかしげにうつむいてしまつた。

そんなフェイトを余所に、間の書に操られた触手達は更なる凌辱を加えるべく蠢き始めた。布越しに大きく掻きあげられた秘穴に触手が向かう。目指す先はヒクヒク蠢くおしっこの穴のさらに上に

ある小さな器官、クリトリスである。汗と愛液で濡れた股間部からそこを探し出すのは、それほど難しいことではなかった。

割れ目の上部に位置する、まだ包皮に包まれているそこへと触手は伸び、黒布越しに肉真珠を守るフードを器用にめくり上げた。

みきっ！

「あうっ!!」

自分で刺くことはおろか、その存在すら意識していなかった小さな肉芽を暴かれ、フェイトは背をのけ反らせながら甲高い絶叫を上げた。一瞬は痛みだったものの、すぐにビリビリした快感に変わってしまう。初お目見えとなるその器官は、今までの愛撫の中で十分膨らんでおり、ヌルヌルに濡れたバリアジャケットの内布に舐められたのである。

(「ここ……こんなところ、知らない……」)

今まで感じたことのない、それでいて恐ろしいほどの未知の快感。ここをいじられたらどうなってしまうのか……微かな恐怖すら覚える。その答えはすぐに与えられることになった。触手の爪が、リズムカルに小さな肉豆を弾き上げてきたのである。

びんっ、びんびん、びんびんっ。

「……」

叫び声を上げることも出来なかった。恐ろしいほど激的な快感電流がついさつき知った器官から産まれたし、全身へと稲妻のように駆けめぐっていく。濡れ布一枚挟んで弾かれるたびにフェイトの小柄な身体が白い顔を晒して限界まで弓なりにのけぞり、そのままギクギクつと痙攣をくり返した。心臓が張り裂けそうほどの強烈な刺激である。ポニーテールの黄金の髪がその度にさら

さらと流れ、うなじから浮き出た甘酸っぱい汗がふわりと薄暗い閉鎖空間内に飛び散っていく。

「くっ！ ひんっ、あつ、あ……っ!!」

触手は更にリズムカルに、テン球を取るかのようにフェイトのクリトリスをいたぶり続けた。一弾きされるたびに小さな豆から電撃魔法のような鮮烈な刺激がわき起こり、それらは腰を焼き、そして背筋をゾクゾクゾクウつとするような感触とともに駆け抜けた。電撃の余波を今だ責めを受け続けている両の乳首に振りまいて、脳へと突き刺さる。

その度にフェイトは引きつったような甘い叫び声を上げてしまふ。ほとんど聞けつ放しの口の端からはだらだらと涎がはしたなくこぼれ落ち続けているが、そんなことを気にしている余裕など無かった。クリトリスから産まれた快感電撃が脳に突き刺さるたびに、まぶたの裏に真っ白な稲妻が走り、身体が一瞬ふわりと軽く浮いたような気分になった。まるでフライヤーフィンで空を舞ったときのような爽快で、何処までも浮遊していきたいと思うような心地よさ。

「はあっあつ、はあつ、はあつ……!!」

乳首と張りつめた乳房。そしてクリトリスを同時に捻られると、もう堪らない程気持が良かった。意識が消えてしまふようなほどの激しい刺激が全身を支配し、股間のヌルヌルした尿液がまるで水鉄砲のようにびゅる、びゅると勢いよく溢れ出してくる。半ばほど白く濁り、濃厚な二オイを漂わせた液体は、少女ながらも本気の絶頂に何度も送り込まれたことを示していた。大量の愛蜜は少女の太股にまで及び、スパッツの内もも部分はもちろん、

皮膚に到るまでふやけかかっているほどである。

「どうした……主の騎士達が味わった苦痛と屈辱は、こんなものではないぞ」

闇の書はフェイトの一連の痾態を眺め続けていた。

「あつ……そ……ん……!!」

立て続けの刺激に息も絶え絶えなフェイトが言い返そうとしたとき、随喜の涙に滲む視界に意外な物が見えた。闇の書が泣いていたのである。無表情で、それでいて哀しげなあの表情で。

「……あな……た……」

もしかすると、この行為は闇の書の本意ではないのかも知れない。あるいは、内に取り込んだはやての意思が悲しんでいるのだろうか。確かに一度は家族も同然の守護騎士を奪われ、復讐の念に燃えていたのだろう。しかし、それだけならば涙を流すことなどあり得ない。「自分は感情を持たない道具である。そう言い続けた闇の書の苦衷が、フェイトには何となくかいま見えたような気がした。

(「なのはと闘っていた、あのときに似ている……」)

そんな既視感すらも感じる。

意を決したフェイトは、送りこみ続けられる強烈な刺激に緩みそうになる顔を必死に作り、笑顔を浮かべた。

「お願い……っだから……はあ……はあ……はあ……はあ……解放して……きつと、分かるから……彼女は、わかってくれるから……」

涙と涎に濡れまみれた笑顔ではあつたが、緋色の瞳はあくまでも澄みきっている。絶望を越え、幾多の戦いを乗り越えてきたフェイトの純真な心が現れているようだった。立て続けの凌辱にも屈

しない、美しい瞳。

「……」

その何処までも綺麗な瞳に見据えられた闇の書は、言葉を止めた。そして、一瞬触手の動きも止まる。

（わかってくれたのか……？）

そう思ったとき、闇の書はぐいっと止めどなくこぼれ落ちる涙をぬぐった。その後には微かに感じられた悲しみも、とまどいのようにも見える涙も、一切が消え去り再び無表情な「道具」としての顔に戻っていた。

「私は主の願いを叶えるのみ……。永久の眠りにつくがよい……」

そう言うと、皮ベルトがまかれた白く細い腕をすつとフェイトに向けた。フェイトの周り三百六十度に幾本もの短剣状のエネルギー物体がふつと現れる。

「……!!」

先ほどと吸らった攻撃魔法だ。しかし、先ほどとはやや色が違った。なのはと一緒に攻撃をされた短剣状のエネルギーはまるで血のように赤い燐光を放っていたのだが、今回の物は紫色の燐光である。だが、どちらにしても非常に危険なのは変わりない。

（まずい……っ）

ただでさえ至近距離である。しかも、今回はなのはのサポートも受けられない上に、自身は身動きもとれない。更に防御力を極限まで減らしているソニックフォームとあつてはバリアジャケットの防護効果もほとんど期待できない。まさに絶体絶命である。

「黒い欲望に染まれ……」

闇の書の無感情な声と共に、一本の短剣がフェイト目掛けて放

たれた。

「っ……!!」

おそろくは襲ってくるであろう強烈な激痛に耐えるため、両手両足指を握りしめ、黒いスパッツ状の布地に包まれたお尻にキュツと力を入れる。

先ほどの一斉射撃とは比べものにならないくらいゆっくりとしたスピードで飛来したエネルギー弾は、すうっとフェイトの下腹部に吸い込まれるように突き刺さった。

「……えっ」

痛くない。なのはと一緒に受けたときは壮絶な爆発を伴った。

今回もそのはずだ、と思っていたのだが……。

（違う魔法なのか……？）

と、無意識のうちに気を抜いた、次の瞬間。

トスっ

「!! ああああああ……!!」

下腹部が炸裂したかのような強烈な激感がフェイトを襲った。しかし、それは間違いなく痛みとは異なる感覚。たとえて言うならば、股間の肉豆と乳房を弾かれたときの気持ちよさをプラスして、十倍したかのような恐ろしいほどの心地よさ。お腹のあたりで産み出された異常な快感は、あつという間に炸裂して身体中を駆けめぐる。頭のとっぺんから足指の先までが信じられないほどの喜びに満たされ、びくびくと痙攣するように震えた。

黒衣の魔法少女は全身を背も折れよとばかりにのけ反らせた。ギクギクと病的なほど肉体を痙攣させながら、目を見開いて舌を突きだしてあらん限りの絶叫をばなってしまう。その声はとて

も気持ちよすぎて、声が勝手に出てしまっているのである。

抜けるような白い肌がまるでゆであげられたかのように真っ赤に紅潮した。毛穴という毛穴が開いて玉のような汗がぶわっと溢れ出し、魔法美少女の全身から飛び散っていく。薄暗い空間にきらきらと舞う汗の滴は幻想的ですらあつた。爪触手にくつろげられた秘唇からは、真っ白く濁り、粘った本気のア液がびゆるびゆると進る。

（こ、こんな……!!）

信じられなかった。今まで生きてきた中で最高の気持ちよさ。未だセックスのセの字も知らぬような少女に耐えられるような快感ではない。目の前に桃色の霞がかり、頭の中ではいくつもの白い稲妻と極彩色の花火がバチバチと弾けていた。本人にはよく分かっていなかったが、少女の身ながら絶頂を極めさせられていたのである。

だが、これで終わりではない。フェイトの周囲にはまだ無数のダガーが浮遊しているのだ。たった一本の攻撃だけでも悶え苦しんでいた黒衣の魔法少女に、闇の書は情け容赦なく連続攻撃を加えた。

数本の紫色の燐光を放つ魔法弾が、再びフェイトの下腹部——少女には分からなかったが、子宮である——にゆっくりと吸い込まれていく。そして、ア液を止めどなく沸き立たせている敏感な肉壺に同時に突き刺さった。

トスっ、トストストスっ。

「!! ……………!!」

今度は声も出せなかった。先ほどの刺激など兎戯としか思えないほど、強烈で理不尽なほどの快感がフェイトの幼い子宮内で炸裂したのである。耐えられるはずなど無かった。頭の中が本当に炸裂しそうだ。呼吸が一瞬詰まり、心臓が止まってしまおうのではないかと思うほどの超絶快感だ。細胞の一つ一つが喜びを訴え、触れる物、感じる物みなが快感である。触手が肌を擦れる感触はもちろん、ひゅうひゅうと辛うじてしている呼吸で空気が喉を通る刺激ですら心地よすぎる。頭が本当に真っ白になり、何も考えられない。

(は……あ……あ……!!)

魔法少女はあつという間に先ほどより数段高い絶頂の粹に放り上げられ、全身を狂ったかのように震えさせた。男も知らぬ肉体が、無意識に空腰を使ってしまう。その腰からは破れた水風船のように止めどなく愛液がこぼれだしまくり、ついには――

ふしやああ……

気づかぬ内に失禁までしていた。ぐちよぐちよに濡れそぼったバリアジャケットの股間部は吸水容量をとくに超えており、何もないかのように愛液とおしっこを勢いよく進らせてしまう。

(あはあ……)

だが、尿がこぼれていくその感触すらも今のフェイトにとって、は壮絶な快感の一つに過ぎない。もはや恥ずかしい、といった感情などどこかに吹き飛ばされていた。

濃厚な愛液と、尿の入り交じった美少女の恥ずかしい芳香が結界内に充満していく。しかし、その二オイでさえもがフェイトにとっては芳しく感じられてしまうのだ。

「……」

これ以上は狂い死にしようかも知れない。それほどのフェイトの痴態を見ながらも、なお闇の書は無表情であった。そして主の愛する騎士達を奪った憎い魔法少女に更なる鉄槌を下した。最後に残っていた三本の魔方陣。それらがゆっくりと動き出した。二本はフェイトの張りつめて、ツンツンに突ききつてバリアジャケット越しにでも容易に分かる乳首に。そして最後の一本は快感神経の極み、クリトリスへ……

壮絶で凄まじい絶頂の海に飲み込まれているフェイトに、それに気付けるはずがない。よしんば気付いていたとしてもどうしようもなかったろう。非情なまでの快感攻撃は、遂にとどめの段階に入った。今だ子宮費めに翻弄され続け、半ばほども桃源郷に遊んでいる美少女の両の乳首、そしてクリトリスに快感の短剣が突き刺さる。

トスッ。トスッ。トスッ。

「っあ……っあ……っあ……!!」

三つの敏感な肉豆の中で、甘い痺れが炸裂した。胸が、股間が破裂しそうなほどの気持ちよさがわき起こった。それらは身体の中で共鳴し合い、増幅して全身へと流れ込んでいく。身体の中で全てが快楽で埋め尽くされてしまったようだった。もう肉体の中で気持ちよくない所など何処にもなかった。今まで気にしたことすらなかったバリアジャケットの裏地と肌が擦れる感触も全身を

舐めしやぶられているかのように感じられて気持ちよくて堪らない。どこから吹いてくるのか、微かな風が火照った剥き出しの二の腕や太股をくすぐるわずかな刺激でさえも絶頂のトリガーに

なってしまう。

(あらし……ひんじやう……!!) もう、ひんじやう……!!)

身体の中でスパークし続ける猛烈な快感の稲妻は凄々しい魔法少女の心をも焼き尽くし、自我までも溶かして甘い快楽へと変換してしまおう。いつまでたっても終わらない快感の波にフェイトの意識は飲み込まれていった。

「……ん……」

フェイトは鉛を詰め込まれたかのように重いまぶたを苦勞して持ち上げた。まだ意識がもうろうとして、視界がはつきりしない。身体中が気だるく指一本動かす気にもならなかった。

(私……一体……)

どれぐらい意識を失っていたのだろうか。バリアジャケットに包まれた全身がしつとりと濡れ、びちよびちよになった股間部はまだ生暖かい感じがする。それほど長い間の失神ではないようだった。

ゆつくりと記憶が戻ってくる。身体中をまさぐられ、今までに感じたことのない壮絶な心地よさ。いまだにおっぱいとお腹の奥がずくんずくと甘く疼いているようだった。ミッド式でもバル方式でもない恐るべき魔法に翻弄され、おしっこの穴からヌルルしたお汁を進らせて声の限りに叫び、悶えた……

(負け……ちゃったんだ……)

決定的な事実。それでも、悲しみはなかった。その昔なのとは自ら望んで対決したときのようにすがすがしい負けではない。むしろほろ負けで、完膚無きまでに叩きのめされたといった方が正



解である。それでも、悔しくはなかった。もちろん一瞬は恥ずか

しど、悔しさ、悲しさが胸の内を占めたのは事実である。しかし、

闇の書が浮かべていた無表情の中に潜む悲しみ。そして止めどな

く流れ続ける涙。それを思い出すと

(仕方なかったんだ、あの子は……)

そう思えてくるのだ。そう感じると、怒りも悔しさも消えていっ

た。

思考を巡らせているうちに意識がはつきりしてくると、色々お

かしいことがあるのに気づく。

「ん、くうっ!?」

まず、はつきりとしてきた視界は全てが反転していた。全ての

物が逆さにひっくり返っているのである。そして、両脚と両肩に

走る強烈な激痛と、奇妙な浮遊感。一度は完全に意識を手放して

しまったので自分の魔力で飛んでいるわけではないのは間違いない

かった。それらを総合して判断すると、

(吊られている……?)

ということになる。重力のせいで体重がかかった両肩と足に痛

みが集中しているのだ。よくよく見れば自分の両脚に触手が幾重

にも巻き付き、限界ぎりぎりまで割り裂かれていた。それはほと

んど真一文字に近く、それなりに身体の柔らかいフェイトにとっ

ても結構な苦痛である。股関節がぎしぎしと痛み、端正な顔が歪む

自分からは見えないが、背中側に回されている両腕もおそらくは

同じような状態なのだろう。

(これは一体……)

周囲を見回してみると、視界の端に未だに氣を失ったままのな

のが見えた。触手に拘束されているのは相変わらずだが、乱暴

をされたような形跡はない。

(よかった……)

自分が受けたような責めを受けさせられていなかったことに

フェイトは心底からほっとした。

(なのは、かならず助けるから……)

親友を自分の様な辛い目に遭わせたくはない。なら少しでも長

く耐えて、闇の書を説得する機会を見つけられない。新たな決

心を胸に秘めるフェイトであった。

「まだ、壊れないのか……」

そんなフェイトにゾツとするほど冷たい声がかげられた。しか

し、声はすれども姿は見えない。おそらくは自分の背後から話し

かけているのだろう。感情を感じさせない声色に一瞬飲み込まれ

そうになるが、まなじりを決して強く叫んだ。

「間違ってる……こんな事、間違ってる……! お願だから、私

たちの話を聞いて……! 話をしよう……! きつと分かるか

ら……! はやても、なのはも、私も、分かっただけだから

……!」

何度目の説得だろう。今回も無駄かも知れない。それでも諦め

る気にはなれなかった。何度でも何度でも呼びかける。頑なな心

を聞くには、言葉しかないのだから。例え今は戦い合っているも、

言葉を紡ぎ続ければ必ず何かが伝わるのだから……! 強く、優

しい親友が自分にしてくれたことを今、自分がしなくてはならな

い。無感情で、そして自分を道具であると言いつける可哀相な、ど

こかかつての自分に似た闇の書に……

「……物と話をするなど無意味でしかない。私は魔導書、道具に通

ぎないのだ。……もう、時間がない。主の願いを叶えねばならな

い……」

「……」

闇の書の言葉は変わらなかった。純真な想いと、垂められた想い。

互いの意思は何処までもすれ違い、接点を見出さない。

(それでも諦めない、諦めたくない……!)

そう思ったフェイトがもう一度口を開こうとした時、闇の書が

動いた。無言で皮ベルトが巻かれた右腕を振る。瞬間、宙にベル

方式に酷似した魔法陣が描かれた。

「っ!?」

全ての行為が反対側で行われているためにフェイトには見えな

かったが、魔力発動が起こったときの独特の空間のふれで何かが

起こっていることを察知する。しかし、だからといってどうする

ことも出来ない。完璧に拘束されている上に、何度も味あわされ

た責めのおかげで身体中に力が入らない。魔法を行使できるだけ

の魔法力もそがれてしまっているようだった。

「ずずずず……」

「!」

フェイトの表情が変わった。この地響き。先ほどコンクリート

から触手が飛び出してきたときと全く同じなのである。という

ことは、ここから何かが召喚されてくるのである。一体、何が

……? 金髪の魔法少女は眉をひそめた。

びきびきびきいっ! どこおおん!!

雷が落ちたような轟音を響かせながら、硬いアスファルトを割つ

て飛び出してきたのは先ほど飛び出してきた触手と一緒に出てきていた、あの太い触手であった。それはフェイトの目の前までせり上がってくとびたりと止まり、ゆらゆらと妖しげに蠢いている。

よく見てみると、先端はフェイトの腕ぐらいに細くなっているが下に行くに連れて太股ぐらいいまで太くなっていく。長さは地面内部にまだ潜り込んだままの部分の想像すると、相当な長さであるに違いない。そして、その表面には今までの触手とは違っていくつものウロコのような物がびっしり並んでいるのだ。裏は硬質な甲羅のような物がかわらのように重なって配置されている（これは……）

そこまで見て、フェイトはようやく触手の正体を悟った。これは以前シグナムと対峙した時に彼女が闘っていた砂竜なのだ。細い肉縄はベルカの騎士を戒めていた物であるし、今黒衣の少女の前にあるものはおそらく尻尾あたりなのだろう。

（なるほど……）
闇の書は一度蒐集した魔法使いの魔法をコピーできる。ということは、以前にシグナムが倒していた砂竜の存在その物もコピーできる、ということなのであろう。そう考えれば合点がいく。しかし、その代わりに新たな疑問が浮上する。

（こんなもので、一体どうするつもりなんだ……？）
細い触手なら拘束などに使えるだろうが、ここまで太いとかえって使いようがない。事実、先ほど出て来たがすぐにどこかへ潜り込んでしまっている。と、なるかと……
（……まさか……！）

フェイトの脳裏に最悪の予想が浮かんだ。もしや、闇の書はこの巨大な砂竜の尻尾でひと思いに串刺しにしてしまうのでは……！ さすがに魔法少女の表情も青くなった。いくら魔法で現代医学とは比べものにならないほどの治療が出来るとはいえ、死んでしまった者を蘇生させることが出来るわけではない。

「……っ」
フェイトの顔面が蒼白になった。

幾多の魔法戦をくり抜けてきたフェイトの心中に、初めて恐怖という感情が芽生えた。シグナムと干戈を交えたときにも感じなかった感情である。あときは戦いの中にお互いの信念をぶつけ合い、好敵手として技を競い合っているような、そんな感覚すら覚えたものだ。しかし、今回は違う。明らかに自分に対する害意しか感じられないのである。

身体中が震えた。歯の根が鳴ってしまいそんなほどに、恐い。（なのは……アルフ……クロノ……リンディ……提督……！）
砂竜の尻尾はゆつくりと伸び続け、フェイトの背後へまわった。その後も更に伸び続ける。
（……違う……？）
いきなり殺されるような串刺しではないのか……そう思っただけで安堵するフェイトだったが、すぐにそれは消し飛んでしまった。なんと、砂竜の先端部分がバリアジャケット越しにくつきりと透けている割れ目にひとりと密着したのである。

「!!」
「!!」
再びフェイトは顔面蒼白になった。どう考えたって「おしっこ」の穴にそんな物が入るわけがない。やはり串刺しなのか……！

冷静に見たとしても、やはりそれは入りそうになかった。まだ男を知らない未開、いや、未成熟の処女穴はあまりにも窮屈で、とてもではないが異物を受け入れられそうにはない。先ほどまでの乳首責めや性感魔法攻撃で十分すぎるほどに潤ってはいしたが、裳はまだ未発達でほとんどつるつるに近い。まだ少女その物の清廉な処女穴なのである。

だが、闇の書はそんなフェイトの肉事情には全くお構いなしだった。それはそうだろう。主のためを思い、どす黒い復讐に身をゆだねた「道具」が仇の事など気にするはずがない。

ついに砂竜の尻尾はフェイトの内部へと侵入を開始した。触手の爪によってはつきりくつろげられていた割れ目の真ん中に、尻尾の先端がびたりと密着する。

「くっ……ん……」

砂漠の生物だからなのか、奇妙なほどの暖熱さが股布越しに感じられた。先端の細い部分はおしっこ穴のわずかな下、膣口に狙いを定めている。スパッツにも似た密着防護衣が灼熱の棒にも似た小さな穴をきゅうきゅうと圧迫すると、じーんとした、甘い不思議な感觸が胸中一杯にあふれた。先ほどまで手の付けられないほど燃えて熱く煮えたぎるようだった下腹部が、棒の熱に呼応するようにまた火照り始めた。そしてきゅんきゅんとお腹の中で疼きを再開し、愛汁が再び分泌され始める。

（どうして……恐い、はずなのに……）

確かに恐怖心を感じる。しかし、何故か胸の奥で微かな期待感を感じてしまうのだ。触手や性感魔法で騎りまくられたフェイトの性は普通の女の子よりも遙かに早く花開いてしまっていたの

である。乳首やクリトリスを触られる悦びを知り、子宮には快感を強く刻み込まれてしまった。本人は意識していないが、絶頂のめくるめく浮遊感と恍惚も味わっている。これだけの快感を教え込まれた小さな肉体は、本人の意思とは無関係にもっと深い性の極みを求めていたのである。つまり、女性器と異物による交合、秘唇に硬い物をねじ込まれ、快感を食っていきまくりたいというあさましい欲望……

フェイトの無意識な欲望を充足するべく、砂竜は動き始めた。バリアジャケットごと未開の処女地へと侵攻を開始したのである。

みきっ！ みきみきみきっ……

「うあああっ！ い、痛い、痛いっ……!!」

指一本すら受け入れたことのない処女穴である。そこを強大な質量によってこじ開けられるのだから痛みが伴うのは当然であった。フェイトの全身に脂汗が浮き、股間を割り裂かれそうな強烈な痛みが身体中を駆けめぐった。挿入、と言うよりは肉を割つていると言った方が正しいのかも知れない。愛液でべとべとに濡れているとはいえ、バリアジャケットをも伴った侵攻なのである。

先端部を無理矢理こじ入れた砂竜は、そこで一旦動きを止めた。

（無理だと悟ってくれた……？）

フェイトは心底からホッとし、溜息をついた。……しかし。

（なに……これ……お腹が……むずむずして……）

先端部から腔を通して伝わってくる熱が、フェイトの全身を再びぼつぼつと火照らせていった。砂竜の硬い尻尾にぎつちりとまとわりついている未成熟な壁が、ざわざわとざわめき始めた。

「あ……ん……」

心臓の鼓動ががトクントクンと速くなっていく。それと同じように、子宮が更に激しく疼き出し始めた。下へ降りていた子宮口から止めどなく熱い愛液が逆流し、きつすぎる肉穴にはまりこんでいる異物に蜜を止めどなくはき出し続けている。もどかしかった。お腹の奥が熱くて痒くて堪らない。その下、股間のあたりはまだ消えない鈍痛が支配していたが、肉が剛棒の太さになじんできたのか、徐々に甘い痺れへと変わってきている。

（もっ……と……）

腰が勝手に揺らめいてしまった。その度にぎちぎちに肉穴にはまりこんだ尻尾が腰に擦れ、

「ひゅっ」

と甘い喘ぎ声が漏れだしてしまふのだ。

頃は良しと見たか、砂竜の尻尾が再び動き始めた。遂に本格侵攻が始まったのである。

ぐりっ！！ みきっ、みぢみぢみぢいっ……ぐりゅっ！！

「はぁひいひいひいひい……！！」

肉を裂くような音と共に、巨大な触手はずつぽりとフェイトの

狭すぎる肉穴を二気に拡張して奥の奥まで潜り込んでしまった。

まだ無垢な割れ目でしかない所に巨大すぎる肉棒が突き立てられた様は、あまりにも凄惨で、しかしそれでいて淫靡でもあった。

砂竜の尻尾は子宮口に到達すると、全力で奥の奥を叩いた。

ずんっ、ずむんっ！

「ひっきゃいひい……んん！！」

子宮を押し潰さんがばかりの、強烈なハードアタックだった。股関節や肩関節が外れるのではないかと思える程の衝撃に、フェ

イトの全身がぐんぐんと大きく縦に揺れた。それに押し出され、腰と尻尾のわずかな合間から水鉄砲のように愛液がびゅっ！ としぶいた。その中には破瓜の血が混じっている。

「はぁおぉおぁあぁ……!!」

しかし、それでもフェイトが感じていたのは痛みではなく、壮絶なまでの快感であった。子宮を叩きつぶされた瞬間、強烈な快感刺激が下腹からわき起こり脳天まで一直線に迸っていく。頭の中で性感魔法貴めの時などは比べものにならないほどの快感波動が炸裂した。急に視界が真っ白く濁り始め、その中で桃色の火花が幾度も幾度も飛び交っていた。

身体が折れそうになるまで弓なりにしなり、顔を晒して感極まつた叫びとも、喘ぎともつかないような声が勝手に口から漏れる。

ただ単に挿入されただけなのに、黒衣の魔法少女はあっさりとは絶頂に飛ばされてしまったのである。

結合部のわずかな隙間からはどろりと濃厚な本気の愛液がごぼごぼと溢き立ち、しぶき、淫らなシャワーを作り上げていた。漆黒のバリアジャケットに無数の染みが広がり、普段の魔法少女からは想像も出来ないほど緩みきった恍惚の表情を浮かべる顔面にもべったりとかかった。

澄んだルビー色だった瞳はもはや濁り、止めどなくあふれる涙に隠れている。魔法少女として闇の書に對峙し、説得を試みようとした時の凛々しさと決意はもう微塵もなかった。

（ひゅ、ひゅ……こ、こんにゃの、こんにゃのおお……し、しんりやう……）

脳みそが快感のあまりにとろけそうで、思考ですらろれつが回

すらに突き進んでいく。

「うあああああ……っおお……んん、んむう……」

全身が快樂漬けにされているとはいえ、さすがに内臓器官への凌辱はどうしようもない違和感と、ある程度の苦痛を伴った。しかし、激痛と言うほどでもない。それどころか、時がたつに連れて腸管がじんわりとなじみ、痛みは薄れて不思議な快感を発するようになってくるのである。身体の内側から燃え上がるような心地よさに抵抗できるはずなどない。とまどい顔はすぐにまた恍惚の表情へと戻り、触手の侵攻に身をゆだねるように力を抜いた。

やがて体内触手は胃へと到達した。肉の異物が胃の中を暴れ回り、胃壁をコリコリとかきむしるとキリキリとした鋭い痛みと、それに倍する形容しがたい悦びの疼きがわき起こる。

「ひむうっうんんっつっ!! あひ、いん！」

絶対にあり得ない、内臓フアックのめくるめく快感に、フェイトは目を見開いて陶酔してしまう。垂れ下がったボニーテールがカクカクと揺れ動き、幾本かの金髪が魔法少女の火照った肌にはべたりと張り付いた。

触手は思う存分胃の内部を堪能すると、胃酸の強烈な消化効果にもめげずに更に進み、食道へと到る。

「おごおおおおっつっ?! んんぐ、うふ……くふ……」

さすがにこの部分を占拠されると、息苦しい。その上胃からせり上がってきたのである。我慢できない吐き気が訪れ、思わず胃液を戻してしまう。だが、それもほんのわずかなことであつた。二度目の嘔吐感。そして胃液と共に遂に触手が口中から飛び出してきた。

ずにゆめるうううっつ!!

「あ……あ……、わらひのなかあ、ぜんぶ、うめられひやつた……の……?」

フェイトのうつろな視界に自分の口から突きだした触手がゆらゆらと蠢いているのが見えた。女の子の大事なところを徹底的に蹂躪され、さらには身体の中まで占領されてしまった。凄まじい快樂と、どす黒い絶望感。もう、この快樂に身をゆだねていられるのならどうなったっていい……

「わらひ……もう……らめ……」

黒衣の魔法少女の全身から、すつと力が抜けた。

「……お前も、我が内で眠るといい……」

闇の書がデバイスを開いた。紫色のベル方式魔法陣が描かれ、触手に犯されたままのフェイトの姿が金色の燐光に包まれていく。

「フェイトちゃん!!」

「……あ……」

吸い込まれる瞬間、誰かの声を聞いたような気がする。しかし今の彼女にはそれが誰の声なのか、わからなかった。



——時の庭園、王座の間。

「うああっ！ ああん、ふ、ひくううっ……!!」

広い空間に嘯き声が高らかに響き渡った。声の主は、フェイト・テストロッサである。美少女は背後から触手にさんざんに突き通されていた。肉縄がフェイトの幼い股間を一突きするたびに、たっぷりと愛蜜が飛び散って石の床を汚していった。

「どう？ 触手の味は……」

彼女の母である、プレシア・テストロッサ。妖艶な笑みを浮かべた大魔導師は股間から生えた魔導のベニスで、実の娘のアナルを喰くことなく貫いていた。黄色い膿液を帯びた肉棒がにゅぷつ、ぬぷつと肛門を抉り、腸を突くたびに金髪の魔法少女は

「はひいっ！ はひい！ きもちいいれすう、母さあん!!」

と痙攣したような喘ぎ声と共に声高らかに叫んだ。

小振りなおっぱいも触手によってさんざんねぶられ、心地よさが胸の内でも幾度も幾度も炸裂する。

さらに……

「きもちいい？ フェイトお」

剥き出しになった魔法少女の股間で、クリトリスをいじり回しているのはアリシアだった。彼女の姉妹「だったはず」の、少女。小柄な少女は人差し指でころころと肉芽を転がし、時には爪で激しい刺激を与えてくる。その度にフェイトの腰がビクビクツツと震え、更に大量の、そして濃い愛液を垂れ流してしまうのだ。

「いいっ、いいの、もつと、もつとそこ、いじって……!」

（違う……これは……夢だ……母さんは私にこんな風に笑いかけてくれたことは一度もなかった……アリシアも、リニスも……今は、

もういない……。でも、これは……)

「フェイトはここを責められるのが好きなのよね？」

プレシアの疑似ベニスがフェイトの腸を抉った。子宮の裏側にを圧迫するスポットを執拗に擦り立てる。その途端に腰がとろけそうなほどの快感が湧きだし、膝がガクガクと震えてしまう。触手で固定されていなければならしくへたり込んでしまっていただろう。それほど気持ち良かった。

「んはああああっっ!!!」

フェイトは金色の髪を打ち振って肛感に悶えた。例えようもなく気持ちが良い。これだけで絶頂に達してしまうほどだった。ギクギクギクつと身体が勝手にのけぞり、黒い手袋に包まれた手で触手をぎゅうつと握りしめてしまう。

桃色に染まった意識の中で、フェイトは思っていた。

（でも、これは……私が欲しかった時間だ……)

親子三人の、狂った淫夢はまだ始まったばかり。フェイトは歪んだ快感に身を任せ、ゆっくりと意識を閉じていった……



「んっ……んふう……あ……あんっ……」

鼻にかかった甘い声が部屋の中に響いている。

窓から差し込む白い月光に照らされ、可愛らしくも淫靡な響きの声を上げているのは、えんじ色のドレスに身を包んだ少女であった。

「ちびっ子」という表現が似合いそうな小柄な体格で、赤みの強い髪を双房の三つ編みにしており、ちよつとつり目ぎみの気の強いような顔立ちをしている。

彼女の名はヴィータ。俗っぽい呼称を使うなら、「魔法少女」である。もつとも、彼女らは自信と誇りを持って自らを「ヴァルケンリッター」と呼んでいる。

そんな誇り高き魔法騎士である少女ヴィータが、膝を折り立てて仰向けの姿勢になってスカートをまくり上げ、シンプルな白のコットンショーツも腿の半ばあたりまでずり下げた恥ずかしい格好で自慰に耽っていた。

黒い手袋に包まれた指は、まだ恥毛の生えていない慎ましやかなワレメを擦り、拙い技巧で快感を紡ぎ出している。手袋に包まれた細い指は秘裂から湧き出した甘酸っぱい淫蜜でグシヨグシヨに濡れており、掻き出された乙女汁は滑らかな内腿まで濡れ光らせていた。

「恥ずかしい？」

薄闇の向こうから柔らかな声がかげられた。柔和な響きを帯びた関西訛りの少女の声。

「はっ、恥ずかしいにきまつてる……んあぁ！」

頬を紅潮させ、男の子のような口調で言い返しながらも、ヴィー

タは股間を弄る指の動きは止められずにいる。黒い手袋に包まれた細い指が敏感そうなピンクのワレメに沿って上下に滑り、あふれ出す蜜液を掻き回している。

蜂蜜にいちごの香りを混ぜたような、少女の甘い淫臭が月光に照らされた空気にふわりと漂った。

「恥ずかしいけど、気持ちいいんやね？」

柔らかな中にかすかな艶めかしさを含んだ声が流れる。それと同時にかすかなモーター音がして、声の主が月光の中にゆっくりと進み出てきた。

青白い光に照らし出されたのは、電動車椅子に座った少女。淡いピンク色のゆつたりとしたワンピースバジヤマ姿である。

ショートカットの前髪を双房、黄色と赤の髪留めでまとめており、優しげな顔立ちをしている。

彼女の名ははやて、闇の書の呪いで両足の自由を失った少女である。

はやての命ずるままに自慰に耽っているヴィータは、彼女に仕える魔法騎士なのだ。

「はやてが……しろって言うから……だから……」

「そっ、自分でしてるヴィータの顔、かわいいよ。だからもつと恥ずかしいところも弄ってみせて」

自慰を続けるヴィータの痾態を鑑賞しつつ、柔らかな関西訛りで声をかける車椅子の少女。月光に照らされた顔はほんのりと紅潮し、彼女もまた興奮し始めていることを示している。

「えっ？ ど、どこを？」

自慰の快感で仰向けにのけ反っていた顔を上げ、主である少女

を見つめるヴィータ。

勝ち気そうなつり目の端には、喜悦の涙がきらめいている。

「……お尻の穴……」

興奮にかすれた声で発せられた淫らな命令に、ヴィータの顔がギクツと強張った。

「そっ、そんなとこ……恥ずかしいよ……」

もの凄く困った表情を浮かべて言いながらも、黒手袋に包まれた指はお尻の狭間に向けて這ってゆく。

まだ未成熟で尻肉のボリュームが乏しいため、仰向けでM字開脚すると、お尻の穴まで丸見えになってしまふ。

ツン、と軽く弄っただけで、華奢な身体がビクンツ、と敏感に反応してしまふ。

最初のうちは恐る恐る肛門を撫でていたヴィータの指は、次第に大胆な動きを見せ始めた。きつく引き結ばれた括約筋の末端を

指の腹でこね回し、指先でコリコリと掻き撚って、性器とは明らかに違う妖しい快感にのめり込んでゆく。

放射状にすばまった慎ましやかなお尻の穴に、勢い余った黒手袋の指先がクブツ、とめり込んだ。

「はうらうらんっ!!」

想像以上に強い快感に身を貫かれてのけぞる三つ編み少女。かかたと後頭部で身体を支えるような姿勢で小柄な身体がのけぞり、きつく収縮したすばまりが指先を食い締めて新たな快感を生んだ。

そのままの姿勢で硬直した身体が二度、三度と痙攣する。緊張を解いてぐったりと床に横たわったヴィータは、自分の身

に何が起きたのかわからぬらしく、呆然と宙を仰いだまま荒い息をついている。

「いったね……こっちはおいで。……弄るのやめたらあかんよ」

優しい声で命じられ、赤いバリアジャケット姿の少女は四つんばいではやての所に這い寄ってゆく。まくり上げられたスカート

の股間では、命令に忠実な右手が再び動き始めていた。

「わたしにも、して……イかせて」

「う、うん……」
敬愛する主人であるはやてにおねだりされ、ワイータの勝ち気な顔に嬉しげな表情が浮かぶ。

目の前にある生足の指先に、魔法少女の柔らかな舌が絡んだ。ビチャビチャと唾液音を立てて、ワイータははやての足指をしゃぶり、頬をすぼめて吸う。

「んッ……そう、いい子やね……」

足指を舐められる快感に心地良さに眼を細め、ねぎらいの声をかけるはやて。

両足は麻痺して歩けないが、感覚はある。

献身的な舐めしやぶりを受けて、はやての身体も甘い匂いを強めてゆく。

小刻みなキスは足の甲からすねへと這い上がり、膝頭の丸みをクルクルと舐め回した。

「くふう……んッ……」

くすぐったげに身をわななかせると主の顔を上目遣いで見上げながら、つり目の魔法少女は献身的な愛撫を続け、舌を這い上げながら

なめらかな内腿を熱心に舐め、ついばむようなキスを繰り返しているうちに、はやての股間も甘い蜜の香りを立ちのぼらせ始めた。

「もう足はええよ。ワイータ、脱がせて……」

切なげな表情を浮かべ、はやては腰をもじつかせた。白いショーツの股間には、楕円形の濡れ染みができている。

「うん……」

ワイータはコクンと頷くと両手を差し伸べ、車椅子少女のショーツを脱がせてゆく。はやても車椅子の肘掛けに手を突き、脱がせ安いように腰を浮かせた。

股布をしつとりと濡らせたコットン布がスルリと抜き取られ、股間があらわになる。

「自分のも弄りながら、わたしにもして……」

恥ずかしげに頬を染めながらも、愛撫をねだる。

「ごっ、ご奉仕、します……」

ワイータはまだ幼さの残るフレッシュピンクの秘裂にクチチュクチュと首を立てて指を使いつつ、主である少女の股間に顔を埋める。

「これが……はやての……」

すぐ目の前にあらわになった薄紅色の秘裂からふわりと立ちのぼる甘く纏着的な蜜香にうっとり頬を染め、ワイータはおすおす舌を伸ばす。

薄けそうに柔らかなワレメに舌先が触れた瞬間、二人の少女は同時にビクンッ！と身をわななかせた。

「はやての味……」

舌に広がる甘酸っぱい蜜の味につり目を細め、魔法少女は熱くなクンニ奉仕を開始する。

火照った谷間に沿って舌を滑らせ、バラの花弁のようなラヴィアをついばむ。

「ふあ……あッ、あんッ！」

華奢な身体をキュツ、キュンッと緊張させ、快感に酔いしれる車椅子の少女。

「はやてが感じてる……もつと、もつと気持ち良くなつて！」

敏感な反応に気を良くしたワイータは、チュウチュウと首を立てて膣口を吸い上げ、小さな舌を閃かせてクリトリスを舐め弾く。

車椅子の上でのけ反ったはやての腰が浮き、性器だけでなくお尻の谷間までもが目の前にさらけ出された。

「はやてのこども、きもちよくしてやる……」

柔らかな尻たぶの狭間でキュツとすぼまったアヌスに、ピンクの舌が差し伸べられた。

「あああッ！ やっ、そこは、そこはあああ！」

恥ずかしげに身をよじって逃げようとする少女の腿を両手で抱え上げるようにしたワイータは、屈曲位になったせいで剥き出しになった性器から肛門へと舌を往復させる。

お子様サイズの体格しかないワイータだが、その力は人間の比ではない。恥じらい悶える主の抵抗を苦もなく押え込み、熱烈な

ご奉仕を続行した。

膣口とアヌスに交互に舌を挿し入れてくねらせ、ピンと尖ったクリトリスにキスしてチュウチュウと吸いしやぶる。

舌の動きと連動させて、ワイータは自分の股間も弄り回してい

る。愛液が泡立つほどに指を往復させ、アヌスに指を注挿させ、クリトリスを挿んでクイクイと扱き上げる。

「あうっ！ やべえ……アタシの方がイっちゃいそう……はやてもイって！」

込み上げる快感に身を強張らせながら、ヴァイタははやての勃起陰核に吸い付き、舌をグリグリと押し付けてハードな舐め転がしを仕掛けた。

「やああ、イクッ！ イクウウウッ！！」

絶頂の大波にとらわれたはやての身体が、激しい痙攣を起こした。

きつく収縮する秘裂の奥からビュッ、プシュッと噴き出した愛液が、ヴァイタの顔を熱く濡らす。

「あ、あたしもっ！ くああああんッ！！」

はやての絶頂と同時に、ヴァイタも二度目のエクスタシーへと舞い上がった。

二人の少女は痙攣を競い合うかのように華奢な身体をしゃくり上げ、全身が痺れるような絶頂快感を堪能する。

「気持ち良かったよ、ありがどう」

しばし絶頂の余韻を味わった後、紅潮した顔に笑みを浮かべて言いながら、ヴァイタの身体を抱き寄せるはやて。

「あ、え、ちよ、ちよっと……」

戸惑った声を上げるヴァイタの唇に、はやての唇がそっと押し当てられ、付着した自分の愛液を舐め取ってゆく。

優しいキスの感触に表情を篤けさせながら、三つ編み頭の魔法少女は深い安らぎを覚えていた。





NAKAGAKI_04

百合触手は正義！
というほど百合百合してませんけどもw

やっぱりなのははロリい方が好きです。

性に疎いなのはとフェイトが股間から生えた謎の物体で
攻めたり攻められたり上になったり下になったりしつつも
ラブライチャイチャしてる感じの漫画が描きたいです。

というか読みたいです。
誰かお願いしますw



あ
と
が
き

無
望
菜
志

今年で同人活動を始めて10年目になります。
その節目となる年に、2冊目の単行本や、
一般誌での連載に加え、総集編まで出すな
んこ、ねらい過ぎとも思いますが偶然です。
マジゴ。

思い返せば借金がかかえたり、人間関係が危
うくなったり、私生活の方がシヤレにならな

くなりかけましたが、今となっ、これは万事解決、
そこそこ苦しみながらも楽しく原稿を描けて
おります。

これも応援してくれる皆様と友人と、こん
な私を拾っ、てくれた編集様のおかげです。

本当にありがとうございます。

さて今後は全くの未定……。夏は申し込むつ
もりですけど、ジャンルが決まらないうつ。

つか「反法使いの夜」はいつ!? ホニトに出る
の!? 教えてエライ人ツ!!

■ 未練がましいあとがきの続き ■

あれこれ言い足りなかったので補足。
多分型月ジャンルで申し込むと思うんですけど
もし別ジャンルに走るとしたら
「裁断分離のクライムエッジ」で
祝ちゃんの自髪自縛プレイな内容で
描いてみたいですw

妙にツポにはまったんですよねー。
ああいうフェティッシュな変態性は見習わないと。
おっばい揉むだけがエロスじゃないんだぜ兄さんッ。

さて最後になりますが、
毎度手伝ってくれているDenim氏、
原稿を寄贈してくれた琴月一純氏、高橋良喜氏、
蒼井村正氏、B-RIVER氏と
最後まで付き合っていたいただいた読者様に
改めて感謝を。

それではまたー。

2009年12月某日
無望菜志

RUBBISH
選別隊

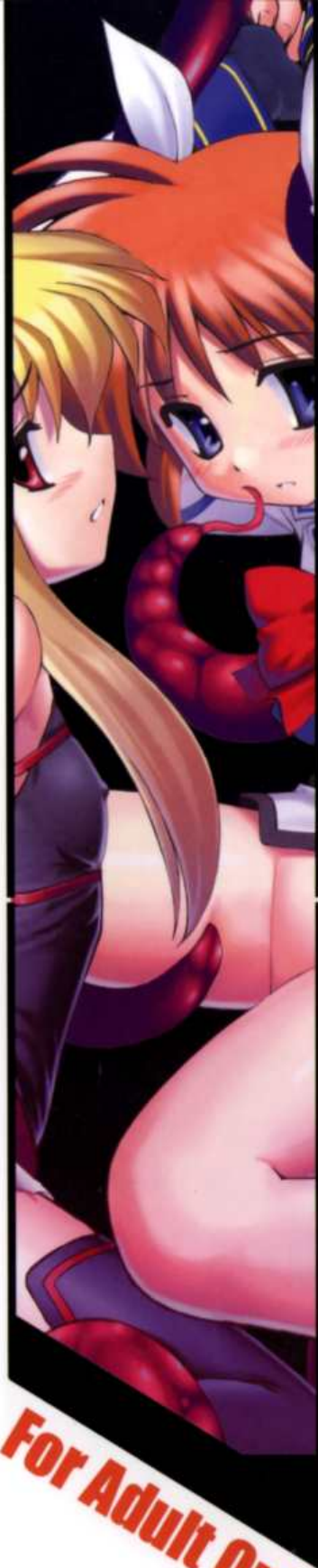


■ 奥付

発行 : RUBBISH選別隊
発行日: 2009年12月31日
印刷 : プリンティングイン株式会社
連絡先: rss@crest.ocn.ne.jp
HP : <http://www3.ocn.ne.jp/~rss/>



RE 総集編 01



For Adult Only

